

宮崎市文化財調査報告書第35集

二月田遺跡・芋字遺跡

県営担い手育成基盤事業 富吉地区にかかる

埋蔵文化財発掘調査報告書

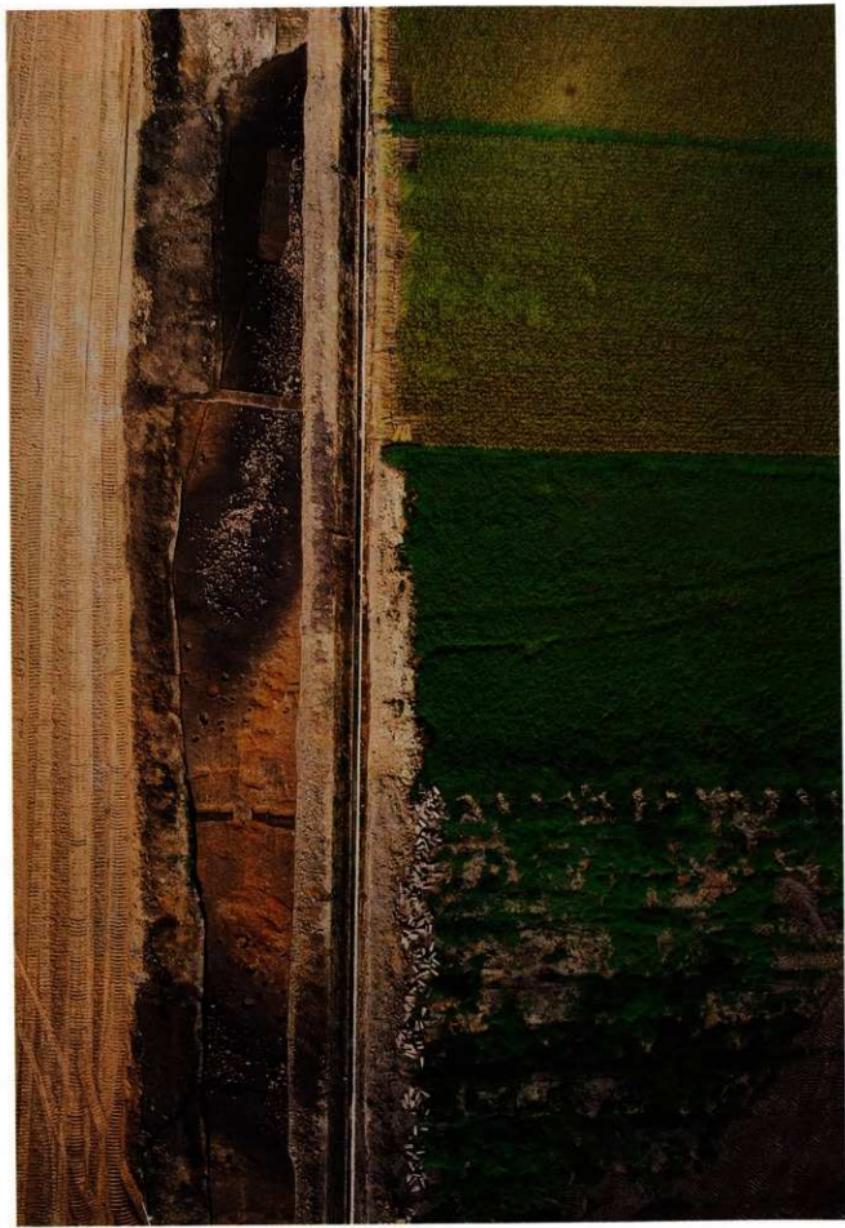
1998

宮崎市教育委員会



遺跡遠景

二月田遺跡



はじめに

近年宮崎市内においては、圃場整備事業、区画整理事業、道路整備事業、宅地造成等様々な開発行為が行われており、それに伴いまして遺跡の発掘調査も年々増加し、古代の生活の一端が窺われるようになって参りました。

本書は、宮崎市西部の富吉地区における担い手育成基盤事業に伴いまして発掘調査致しました、二月田遺跡、芋字遺跡の報告書であります。富吉地区は県指定史跡生目村古墳（横穴）が存在していますが、その他の古代像は不明の地区でありましたので、大量の弥生式土器や平安時代の土器が発見された事は意義あるものであります。

現在、宮崎市では国指定史跡生目古墳群の史跡公園整備事業を進めており、生目古墳群の性格の解明を進めていくうえで、周辺遺跡である二月田遺跡、芋字遺跡の成果は有用なものとなりました。

最後になりましたが、発掘調査を円滑に進めて頂いた作業員の皆様、関係各位に感謝申し上げると共に、本書が郷土の歴史解明の一助となれば幸いに思います。

平成10年3月

宮崎市教育委員会

教育長 稲倉宗知

例 言

1. 本書は宮崎県中部農林振興局による県営担い手育成基盤事業 富吉地区にかかる、二月田遺跡、芋字遺跡の発掘調査記録の報告書である。

2. 調査、整理期間

二月田遺跡(1次)	平成7年9月4日～平成7年10月11日
二月田遺跡(2次)・芋字遺跡	平成8年8月2日～平成8年11月8日
整理期間	平成9年4月1日～平成10年3月31日

3. 調査組織

調査主体	宮崎市教育委員会
調査総括	文化振興課 文化財係長 井手上 仁悟
調査事務	主 事 岩城 勝志
調査員	主 事 中山 豪 (平成8年度は技師) 技 師 鳥枝 誠 (平成8年度)
補助員	嘱 託 椎 由美子 タ 松永 光雄 タ 小川 正子 タ 久富 なをみ

4. 本書の執筆は、中山が行った。

掲載した図面の実測は中山、鳥枝、椎、松永、小川が行い、製図・図版の作成は中山、久富が行った。

写真撮影は、中山が行ったが、空中写真については、株式会社スカイサーベイによるものである。

5. 本書の編集は中山、久富が行った。

目 次

第1章 序 説.....	1
第1節 遺跡の立地と環境.....	1
第2節 調査に至る経緯.....	1
第2章 二月田遺跡の調査.....	3
第1節 調査の概要.....	3
第2節 遺構と遺物.....	5
1. 遺構について.....	5
a. 平成7年度の調査.....	5
b. 平成8年度の調査.....	5
2. 遺物について.....	7
a. 平成7年度の調査.....	7
b. 平成8年度の調査.....	10
第3章 芋字遺跡の調査.....	26
第1節 調査の概要.....	26
第2節 遺構と遺物.....	26
1. 遺構について.....	26
2. 遺物について.....	29
第4章 まとめ.....	41

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡図.....	2
第2図 遺跡位置図.....	3
第3図 平成7年度調査区土層図.....	4
第4図 平成8年度調査区土層図.....	4
第5図 平成7年度A区平面図.....	6
第6図 平成7年度B区平面図.....	6
第7図 平成8年度調査平面図.....	6
第8図 出土遺物実測図1.....	8
第9図 出土遺物実測図2.....	9
第10図 出土遺物実測図3.....	12
第11図 出土遺物実測図4.....	13
第12図 出土遺物実測図5.....	14

第 13 図 出土遺物実測図 6	15
第 14 図 出土遺物実測図 7	16
第 15 図 出土遺物実測図 8	17
第 16 図 出土遺物実測図 9	18
第 17 図 出土遺物実測図 10	19
第 18 図 A 区土層図	27
第 19 図 B 区土層図	27
第 20 図 A 区平面図	27
第 21 図 B 区平面図	28
第 22 図 C 区平面図	28
第 23 図 D 区平面図	28
第 24 図 E 区平面図	29
第 25 図 A 区出土遺物実測図	31
第 26 図 B 区出土遺物実測図	31
第 27 図 C 区出土遺物実測図 1	32
第 28 図 C 区出土遺物実測図 2	33
第 29 図 C 区出土遺物実測図 3	34
第 30 図 D 区出土遺物実測図	34
第 31 図 E 区出土遺物実測図	35

表 目 次

二月田遺跡

出土土器観察表	20
出土石器観察表	25

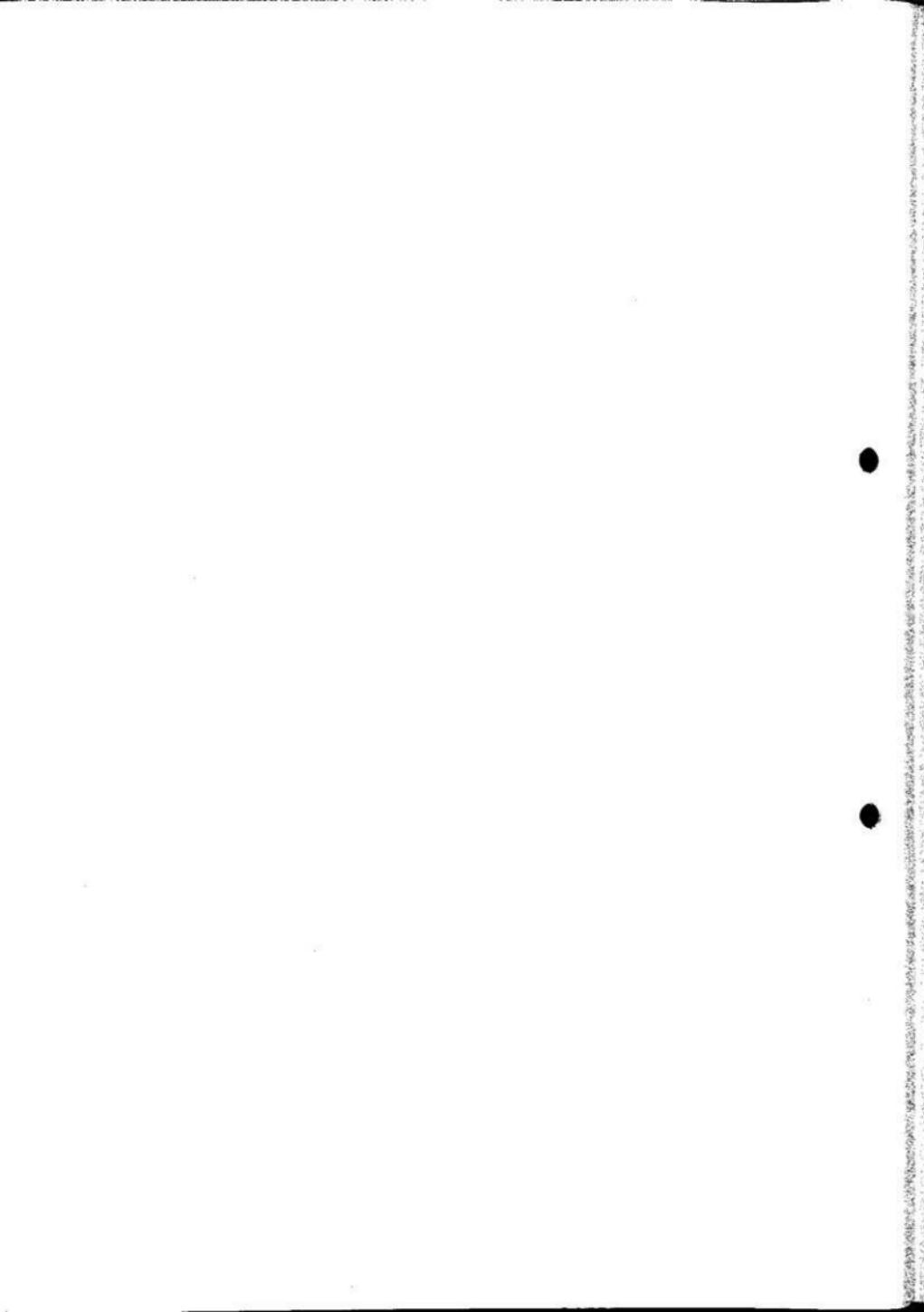
芋字遺跡

出土土器観察表	36
---------------	----

図 版 目 次

図版 1 二月田遺跡 1	43
図版 2 二月田遺跡 2	44
図版 3 二月田遺跡 3	45
図版 4 二月田遺跡 4	46

図版 5	二月田遺跡 5	47
図版 6	二月田遺跡 6	48
図版 7	二月田遺跡 7	49
図版 8	二月田遺跡 8	50
図版 9	芋字遺跡 1	51
図版 10	芋字遺跡 2	52
図版 11	芋字遺跡 3	53
図版 12	芋字遺跡 4	54
図版 13	芋字遺跡 5	55
図版 14	芋字遺跡 6	56



第1章 序 説

第1節 遺跡の立地と環境（第1図）

二月田遺跡・芋字遺跡は、宮崎市西部の生目地区の最も西寄りで、高岡町と境を接する富吉地区に存在する。大淀川の支流の一つである天神川が中央に流れる水田域を挟み、向かいあう丘陵及び微高地上に立地している。二月田遺跡は、現在水田として利用されている標高約9～10mの微高地の、東側の背後が丘陵となり西に開けた部分に位置し、大正時代に既に圃場整備が行われている。芋字遺跡は、標高約12～13mの北東に向いた谷を開いた水田や畑の部分に位置している。

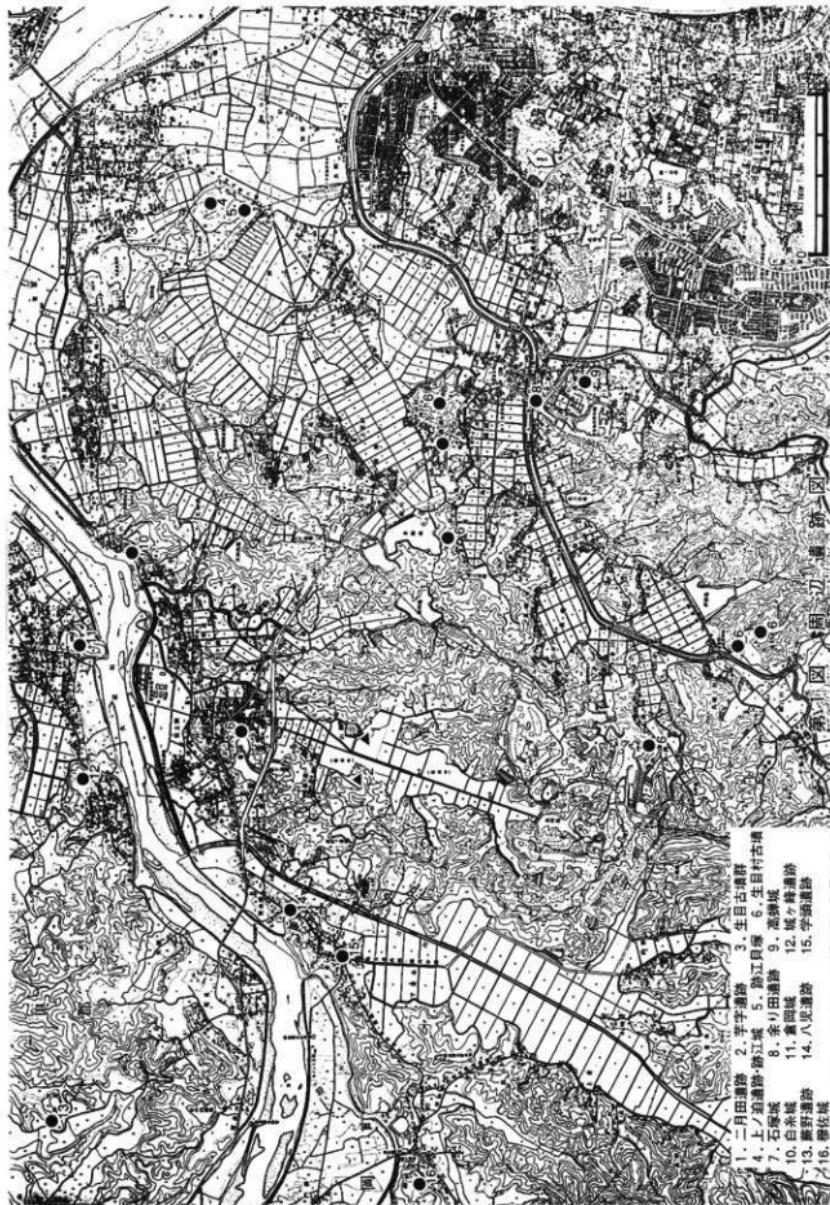
両遺跡周辺はこれまで発掘調査例は無く、富吉の集落部に土器散布地が数ヵ所、古墳時代後期の遺跡として県指定史跡生目村古墳(横穴)が認められ、大淀川に面した部分に中世山城の白糸城があったとされるだけである。より広い範囲では、北東約3kmの所には、縄文時代早期・前期の跡江貝塚、弥生時代中後期の環濠集落上ノ迫遺跡、円形周溝墓・前方後円墳・円墳・地下式横穴墓と弥生時代終末、古墳時代前期から後期に渡る国指定史跡生目古墳群とその周辺遺跡群、中世山城である跡江城が載る標高約25mの跡江台地が位置している。南東約2～2.5kmには、県指定史跡生目村古墳(横穴)、古代の遺跡として水田遺構と自然流路が検出され、墨書き土器や牛や犬の骨、櫛等の木製品が出土した余り田遺跡、中世山城の石塙城・高蝉城が所在している。また、西側約1.5kmには標高12～14mの微高地に学頭遺跡、八児遺跡が所在する。学頭遺跡は、縄文時代前期から晩期、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての遺跡であり、八児遺跡は古代から中世の遺跡である。さらには中世日向三高城の一つである穆佐城もその西側に位置している。北側の大淀川対岸台地上では、蕨野遺跡から9世紀後半の土師器焼成土坑が6基検出されている。

第2節 調査に至る経緯

平成6年度に新規採択された県営ほ場整備事業(扱い手育成)富吉地区について平成7年2月10日に宮崎県中部農林振興局、文化課、宮崎市耕地課、文化振興課の4者で協議を行い平成7年度に文化課により試掘を行い、平成8年度に発掘調査を文化振興課が行うこととした。平成7年8月22日の県文化課による試掘結果を基にした協議の際に、工事の施工上二月田地区の東側半分は道路新設のため早期調査が必要となり、同年9月から発掘調査を行うこととし、芋字地区については平成8年8月から調査を行い、両遺跡の調査報告書は平成9年度に刊行することに決定した。

平成8年度は、当初県文化課の行った試掘調査により、芋字遺跡は櫟林を中心とした区域のみを発掘調査することとなっていた。しかし、櫟林の南東側丘陵尾根にある杉林を伐開後に踏査したところ、帶状に黒色土の部分があることが判明したために、発掘調査の対象区にすることとした。

さらに、平成7年度に発掘調査を行った二月田遺跡の西側延長上の道路拡幅工事に伴う側溝工事の床掘り段階で、黒色土に土器を多量に包含する層を2ヵ所発見したために道路工事の延期を依頼すると共に道路工事部分を早期に調査することとした。



第2章 二月田遺跡の調査

第1節 調査の概要（第2図）

平成7年度の二月田遺跡の調査では、道路予定区を水田の畦により調査区A、B、C、D区の4区に設定した。

A区では、表土である水田面を約20cm剥ぎ取った段階で、地山である黄色粘質土が現われ、黒褐色埋土のピット群が検出された。

B区では水田面を約20cm剥ぎ取った段階で、黄褐色土に白色火山灰が混入した層が現われ、若干の土器が混入していた。その黄褐色土に白色火山灰が混入した層を外すと西側壁より一面に土器の破片が広がる黒色土層が現われ、幅約6mの溝状遺構が検出された。

出土遺物としては、奈良時代から平安時代の土師器と須恵器が検出された。

C区では表土を剥ぐと濃灰色の粘質土が現われ、遺構の検出は出来なかった。

D区でもC区同様の状況で遺構の検出は出来なかった。

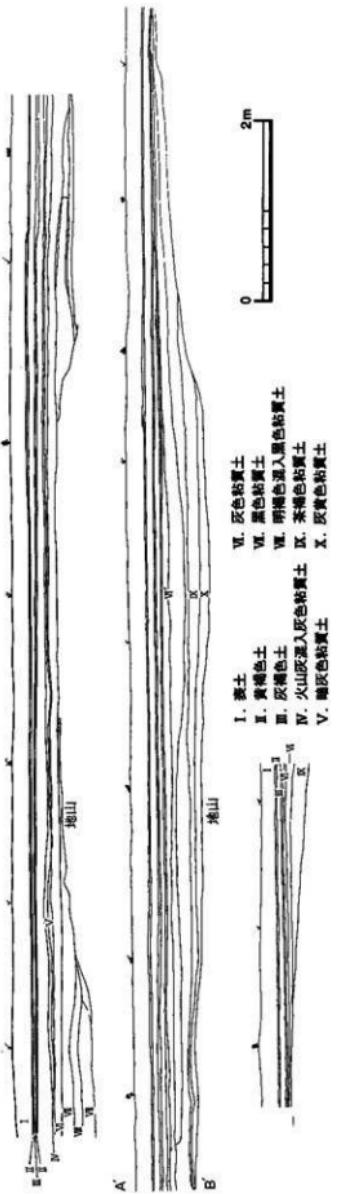
平成8年度の二月田遺跡の調査では、道路工区内の表土である水田面を剥いだ段階で、黒色土の見られる東側の部分と黒色土と黄色土が半々に見られる中央部と再び黒色土のみとなる西側の部分に区分した。

遺構としては、東側と西側が繋がると思われる大型の環濠状の溝状遺構と数本の溝状遺構、ピット群を検出した。

出土遺物としては、弥生時代中期から終末期の土器及び石器と古墳時代から平安時代の土師器と須恵器が検出された。



第3図 平成7年度調査区土層図



第3図 平成7年度調査区土層図

第4図 平成8年度調査区土層図



第2節 遺構と遺物

1. 遺構について（第3、5、6図）

a. 平成7年度の調査

A区ではピット群を検出したが、調査面積が狭いために明確に掘立柱建築物の柱穴と判断することは出来なかった。

B区では西側壁から約12mの範囲で黒色土の土器包含層が広がっており、掘り下げの結果、現地表から65cm程の深さの溝状遺構が検出された。幅については、B区内では上端の両端を明確に計れる部分は無かったが、幅6mになると推定される。現地表から約20cmのところで遺物包含層になるが、溝の最も深い部分で20cm程度の薄いレンズ状のものであるが、これは火山灰混入の黄褐色土層による削平を受けているので、本来はまだ厚く溝状遺構以外にも広く有ったと考えられる。

B区のセクションを詳細に見ると、表土として外している部分で水田面と考えられる層と黄褐色土層という組み合わせが3回繰り返されており、その前に火山灰混入灰色粘質土層による灰色土層のほぼ水平な削平が見られ、この面が最初の水田利用面と思われる。

b. 平成8年度の調査（第4、7図）

平成8年度の調査区は、東西幅約65m、南北幅4～6mの範囲の道路敷きであり、遺構としては、幅約8mの大型の溝状の遺構と4本の溝状遺構、20数箇のピットが検出された。

基本層序は、表土（耕作土）、火山灰混入褐色粘質土、淡褐色粘質土、黒褐色粘質土、黄色粘質土で、淡褐色粘質土は須恵器・土師器を含む層で、黒褐色粘質土は弥生土器の包含層である。

大型の溝状のものは、調査区東側では幅約8m、深さ約50cmあり、ほぼ南北に横切る形で検出され、さらに調査区中央から西北西の方向に向かい、東から西に徐々に深くなる形で調査区全体に検出された。溝状の遺構の断面は緩やかなレンズ状になっており、その形態から積極的に人為的なものと判断される部分は見つけられなかった。

溝状遺構は、東から順に1号、2号、3号、4号と呼ぶこととする。

1号溝状遺構は、東側の大型の溝状遺構のほぼ中央部を南北に走っているが、大型の溝状遺構の床面でしか検出出来なかったため、幅約40cm、深さ約15cmを計るのみである。

2号溝状遺構は、調査区中央からやや東に寄ったところで南北に走っており、幅約1m、深さ約30cm、断面は中央部に段を持つY字形を示している。

1号溝状遺構と2号溝状遺構は、共に底幅約20cmで15mの間隔を置き南北方向に並行して走っており、時期は不明だが条理の名残りと思われる。

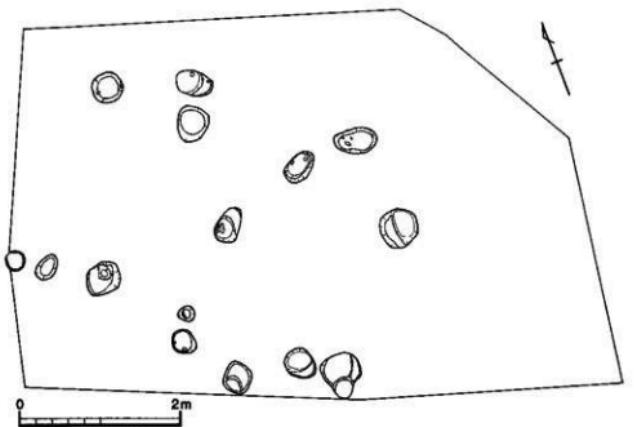
3号溝状遺構は、調査区中央からやや西に寄ったところで南東に走っており、長さ約14m、幅約30cm、深さ約10cmを計るのみである。

4号溝状遺構は、調査区西側を南西に走る幅約20cm、深さ約10cmを計るものである。

3号溝状遺構と4号溝状遺構は、擾乱によって削除されているがほぼ直角に交わると判断され、その性格は不明である。

ピットの箇数はある程度有るが、大きさや深さ、位置関係から掘立柱の遺構となるものは見つけられなかった。

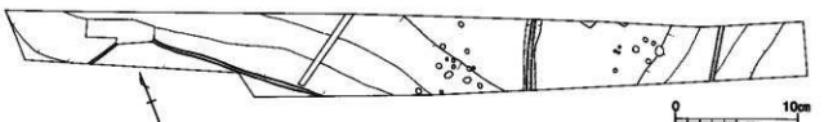
また、調査区北側の壁に掛って90cm程度の方形のピットが2箇、約3m間隔で検出され、大型の建物の可能性も考えられる。



第5図 平成7年度A区平面図



第6図 平成7年度B区平面図



第7図 平成8年度調査平面図

2. 遺物について（第8～17図）

a. 平成7年度の調査（第8図）

A区のピット内からは土器の小片が出土したが、図示出来るものは無かった。

B区の溝状遺構では、黒色土内に土器の小片が一面に広がって多量に出土したが、接合可能なものが少なく、出土量に対して掲載図は少なくなってしまった。

土師器（1～20）

壺（1～16）

1は内外面ともに丁寧なナデが施され、底部がやや上げ底になるものである。2は器壁から底部までが薄く丁寧にナデられているもの、3は底部が一旦薄くなったち中央部が厚くなるもの、4は器壁よりもかなり厚い底部を持つものである。5は直線的に開く体部に薄くナデ上げた口縁部を持つもので体部と底部の境に段を有している。6は所謂充実した高台といわれるものである。7は底部に2重の沈線様のものが見られ、高台貼付け前の処理が窺える。8は5mm程の短く直線的な高台を持ち、9は幅が厚く踏ん張った形の高台を持つものである。10～16はハの字になる高台を持つもので、13は底部がレンズ状になっており、14は成形時の指頭痕が花弁状に明瞭に残っている。

甌（17～19）

出土したのは把手の部分のみで、17は小振りの牛角把手である。18、19は4～5cmの粘土帯をくの字に曲げて貼付けたもので、土器本来の大きさはかなりなものになると思われ、甌ではない可能性もある。

支脚（20）

不整橢円形の断面を示し、脚上部はヘラ状のもので削った跡が有り、表面は黒く焦げたようになっている。

須恵器（21～29）

蓋（21～23）

いずれも天井部から口縁部の一部のみで、21は平坦な頂部と直線的な天井部を持ち口縁部は短く丸めた形になっている。22は天井部はゆるやかに湾曲するが口縁部は水平に伸び断面三角状の口唇部を持ち、23はドーム状の天井部にやや内湾させた口縁部を持っている。

椀（24）

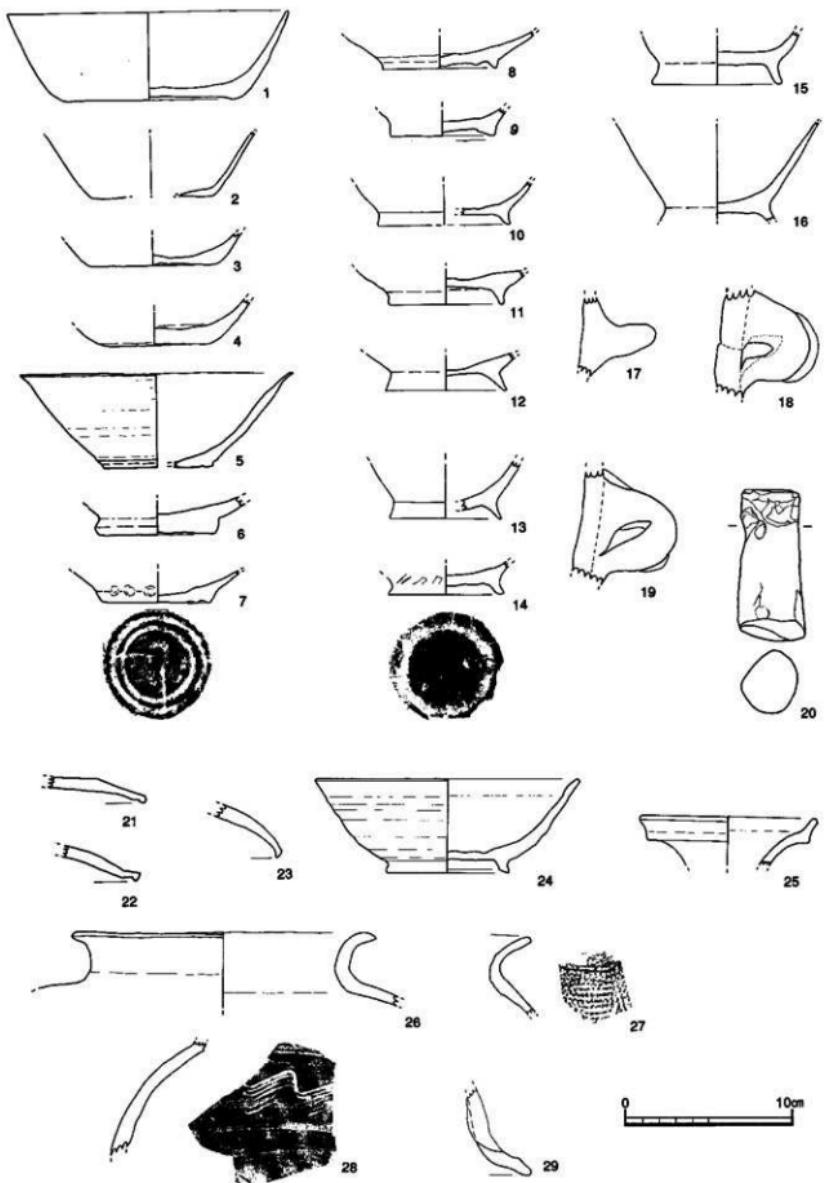
高台はやや厚めで端部を斜めに削っているために接地面が僅かしか無く、体部は外膨らみに立ち上がるが、口縁部ではやや外反する。

壺（25）

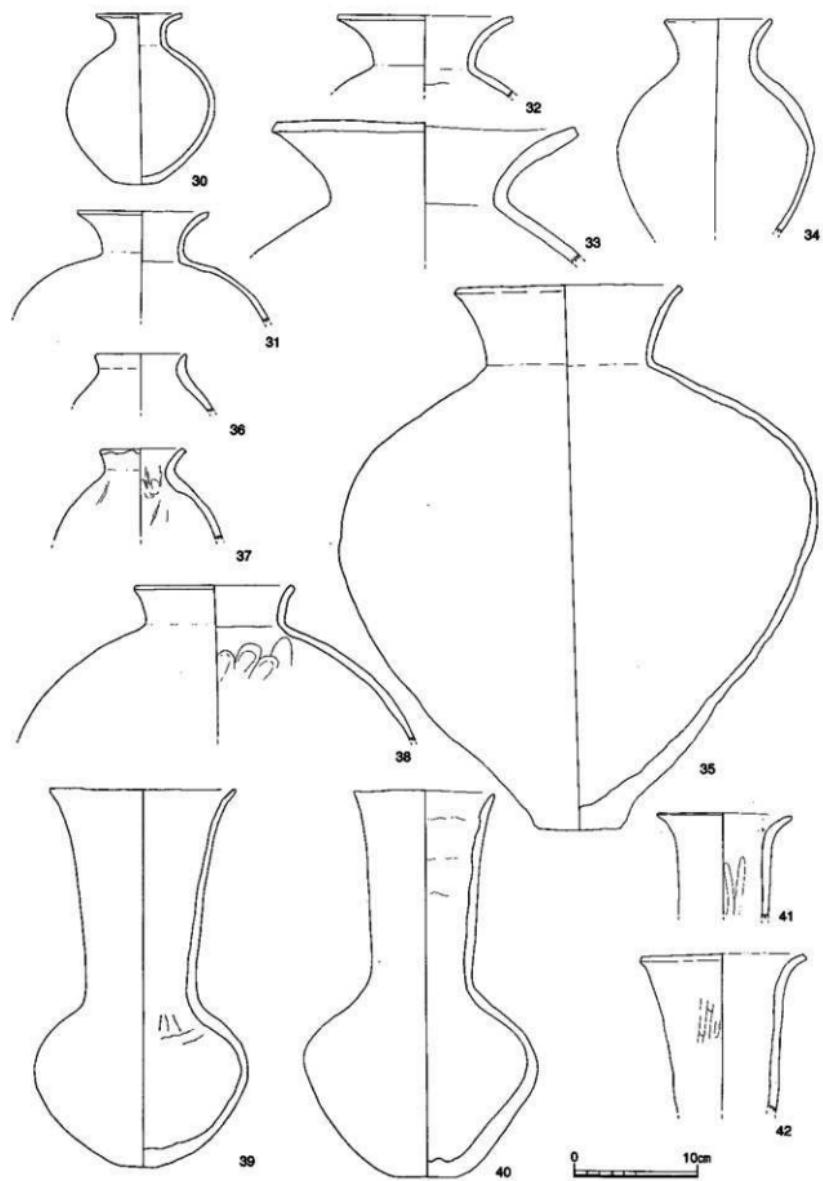
頸部から口縁部にかけての破片で明瞭な稜線は見られない。

壺（26～28）

26は短い頸部と強く外反する口縁部のもの、くの字外反する口縁部で、作りはやや甘い感じがある。28は頸部で波状文と沈線が施されており、ヘラによる刺突を行った部分がごく一部に残っている。



第8図 出土遺物実測図1



第9図 出土遺物実測図2

高坏（29）

透しの入った脚の一部で、透しを入れた際の粘土のはみ出しがそのままに残っている。

b. 平成8年度の調査（第9～17図）

遺物は、全て大型の溝状の構造の埋土から検出されており、上層は古墳から平安時代、下層は弥生時代の中期から終末期に比定される。

弥生土器（30～120）

壺（30～71）

広口壺（30～35）30、31、34は頸部が見られ、32、33は胴から直接外反する。

短頸壺（36～38）36は1cm程の頸部が有るが無頸壺とも言えるものである。

長頸壺（39～42）39の頸部は口縁に向かうに連れて徐々に広がってゆき、口縁部をやや外反させる。40の頸部は直線的に伸びるが、口縁部で内面肥厚しやや外反する。41の頸部は直線的だが、口縁部の外反は強い。42は口縁部に向かって広がって行き、口縁部は外反する。

二重口縁壺（43～50）43、48はほぼ直立する口縁部、44は屈曲部に細く面のあるもの、45は直線的に屈曲し、46は断面三角状のものを貼付けたもの、47は頸部の倍の厚みのある断面長方形のものを貼付けたもの、49は屈曲部の外側に張出しが有るものである。50は長頸壺の口縁部を大きく外反させ、更に断面三角のものを貼付けたもの。

菱形壺（51、52、55）胴中位に最大径を持ち、51は丸底である。

鉢形壺（53、54）53は胴中位に最大径を持ち、54は胴下位に最大径を持つ。

56から71は胴部及び底部である。56は平底で胴中位に最大径があるが頸部が歪なっている。57、58、59は胴部の高さより胴中位の最大径が広く楕円形を呈するもので全体にどっしりした感じのするものである。60～64は、胴中位の最大径が広く菱形を呈するもので、60～63は平底であるが64は丸底である。65～67は平底で、68は底部をやや突出させた平底、69～71は尖り気味の丸底である。

壺（72～91）

72、73は逆L字状の口縁と口縁下に2ないし3条の三角の貼付突帯を巡らすものである。74は胴部最大径より口縁径の方が広く、くの字外反する口縁と高台状の底部を持つ。75、76はくの字外反する口縁と刻み目突帯を巡らすもので、75は全体にシャープな作りだが、76は薄い器壁で口縁端部をつまみ出している。77～79は胴部最大径より口縁径の方が広く、緩やかに外反する口縁のもので、77は小さな平丸底、79は高台状の底部を持つ。80は直線的に開く口縁と胴上位に最大径のあるもので、81～83は大きいくの字外反する口縁のもので、82は叩きの痕が明瞭である。84～86は分厚くくびれながら伸びる底部である。

87～91は厚めの底部を持つもの、87、88、90は高台状になるもので、89、91はやや上げ底になるものである。

鉢（92～96）

全て器高より口縁径の方が長いもので、92は口縁端部を強くナデ付け、胴上部に胴最大径があり、突出した底部を持つ。93は口縁から滑らかに底部に至り平底状の丸底になる。94は外反す

る頸部に半球形の胴部が付き、底部は平底状だが歪になっている。95は短く緩やかに外反する頸部に半球形の胴部が付き、底部は丸底状だが平底である。96は短くハの字に開く脚を持つものである。

高坏（97～104）

97、98は高坏の坏部で、体部と口縁部の境に段を持つものである。99～104は脚部で、99は大きく開く坏部に徐々に開く脚柱に強く開く裾を持つもので、円形透しを脚中位に持つ。100は坏部との接合部から直線的に大きく開く脚部である。101は坏部との接合部から直に伸びる脚柱部で分の厚い作りである。102、103は坏部との接合部から緩やかに外に開く脚部で、102は裾部は開いたままで、103は平坦面を持ち、共に円形の透しが施される。104は外彎気味に開く脚部で裾は端部をつまみ上げた形になる。

器台（105～107）

105は裾部が大きく開くもので上下2列の円形透しが見られる。106は体部中央より上位に最小径があり下部に円形透しが入る。107は体部の径が広く外反する裾部を持ち大きな円形透しを持つ。

小型土器（108～115）

108、109、110、112、115は鉢、111は甕、113、114は壺の小型土器で基となった器形が良く分かるものである。

手捏土器（116～120）

116～118は平底、119は尖底気味の平底、120は尖底気味の丸底である。

石器（121～123）

121は刃部半ばと基部を欠損した磨製石鎌で、断面菱形を呈し全体に研磨痕が残る。122は半月形磨製石庖丁の欠損品で、両側穿孔の穴が2ヶ所に見られる。123は刃部を欠損するが、面取りを確認すると平行四辺形に近く、L状の柄に付ける鎌と思われる。

須恵器（124～132）

124～127は蓋で、124、125は口縁部に短い返りを持つもので、124は宝珠状の撮み、125はボタンと宝珠の中間の様な撮みを持つ。126は扁平な天井部に顔面が台形状の口縁部を持つもので、127はドーム状の天井部に断面椭円形の口縁部を持つ。

128は長頸瓶で頸部に1条の沈線が巡る。

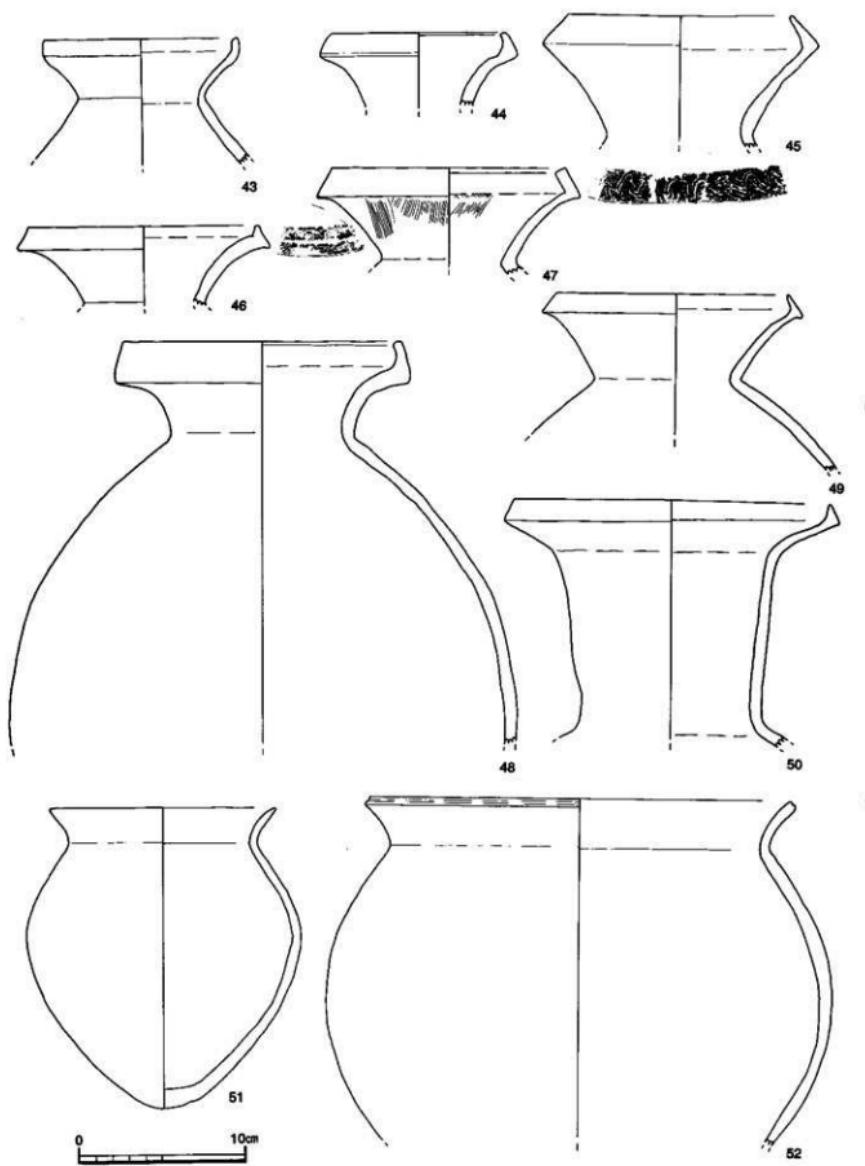
129は短くしっかりした高台が付く坏である。

130は甕の頸部で口縁部は丸く收め、2本の沈線を巡らすものである。

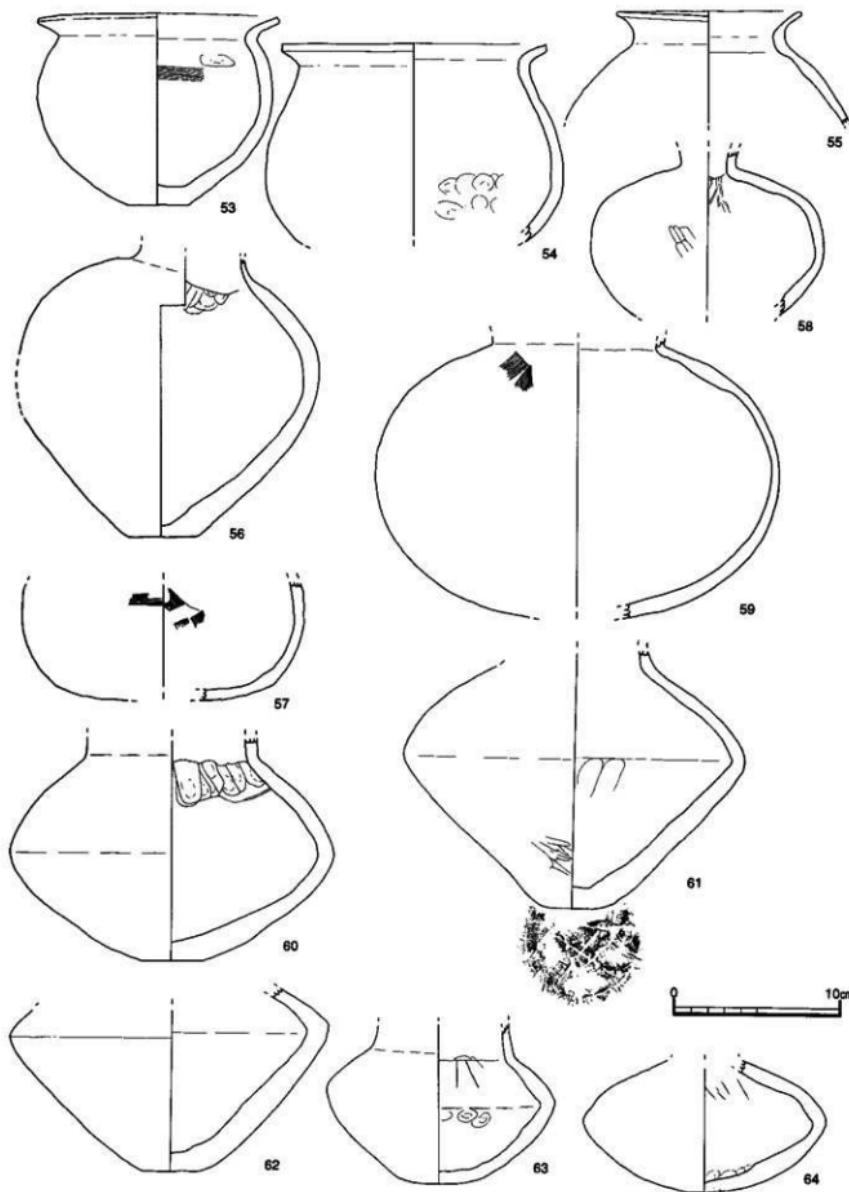
131、132は同一個体と見られる短頸壺でヘラ記号を持つ。

土師器（133～136）

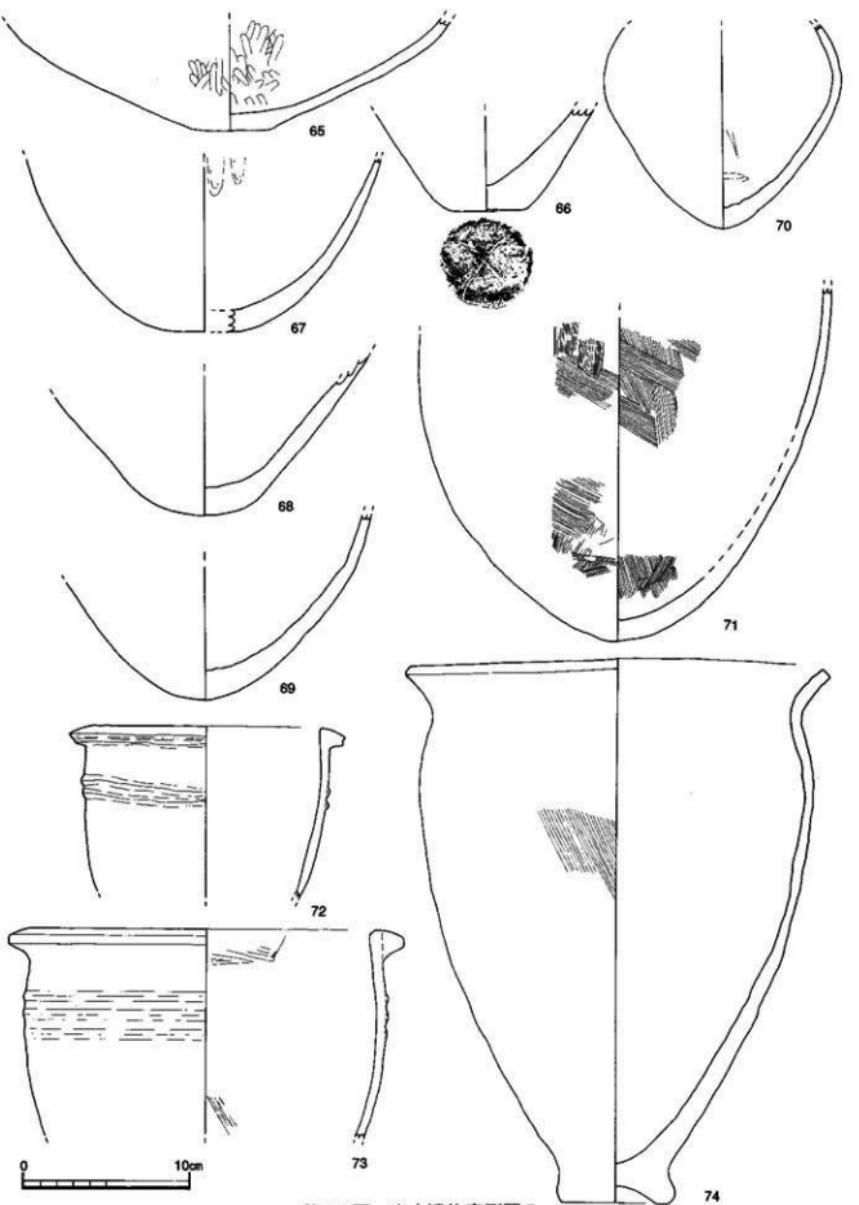
全て甕で、133は牛角把手、134は丸みを帯びた底部、135は細身で長胴のもの、136は細身の底部である。



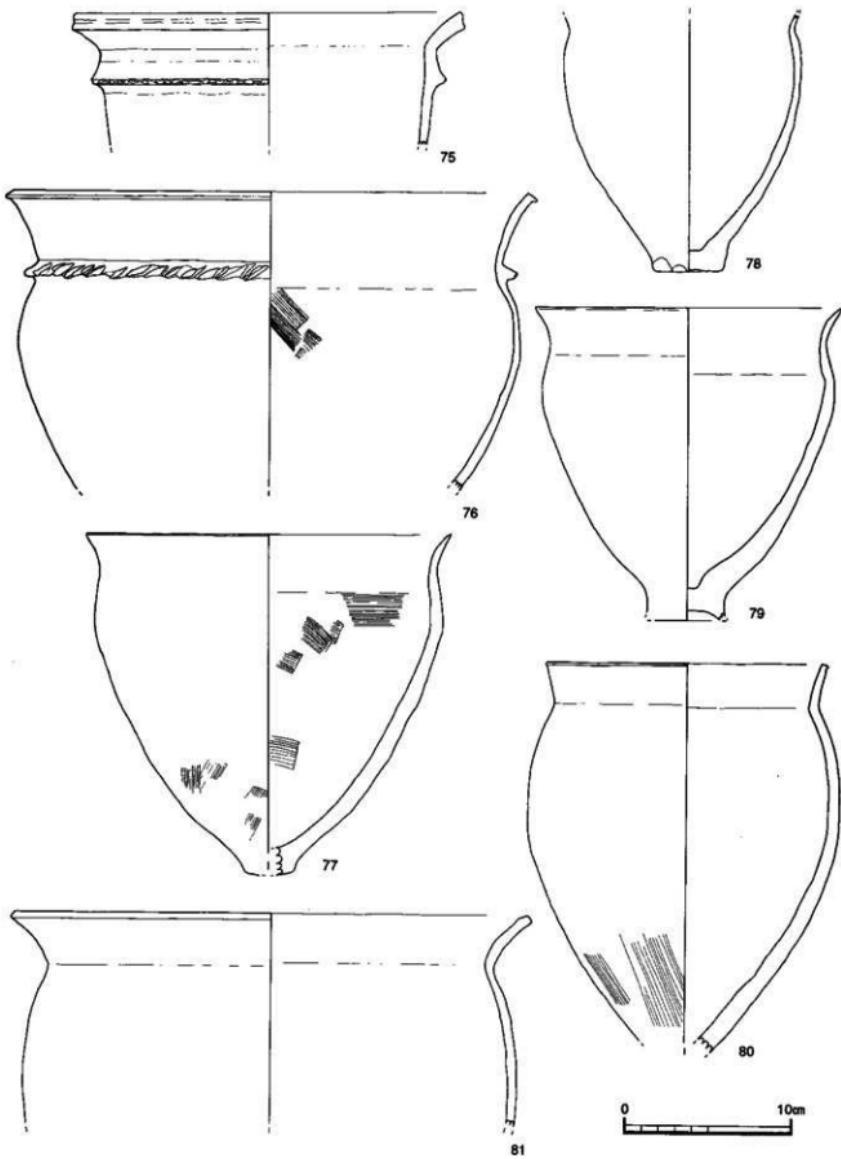
第10図 出土遺物実測図3



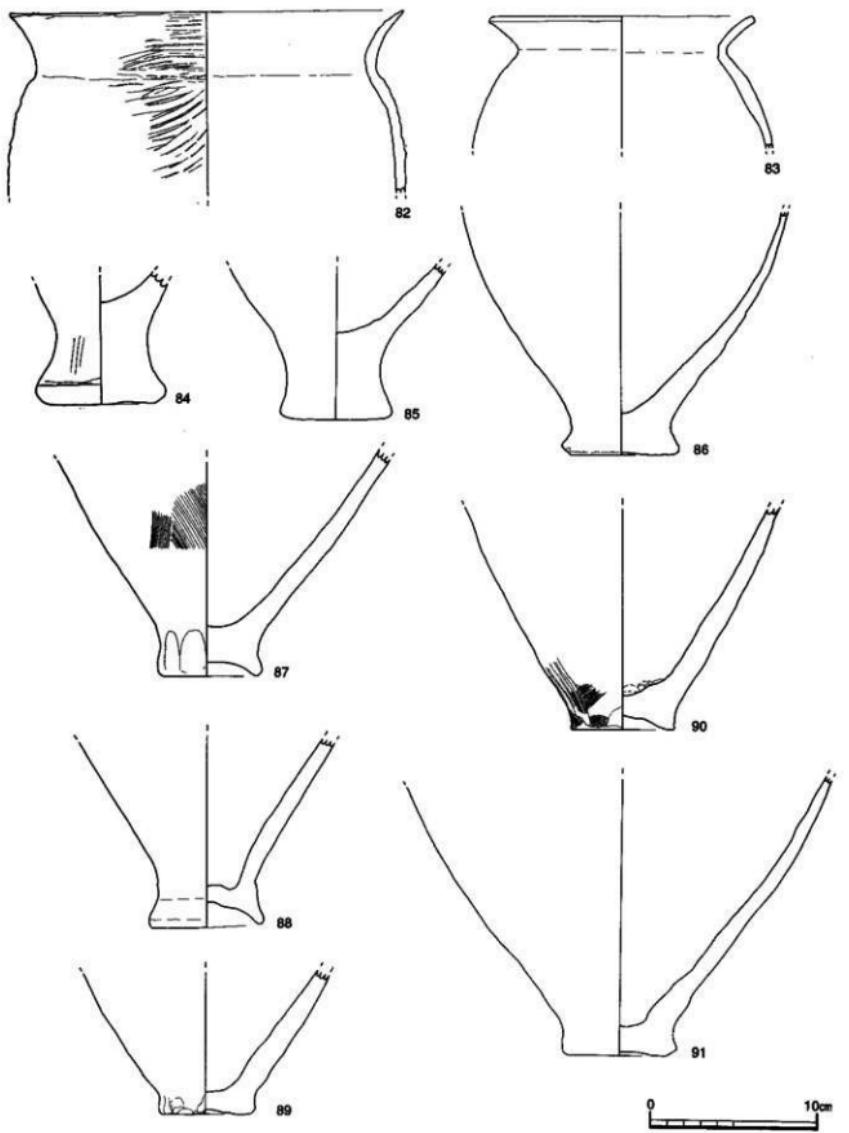
第11図 出土遺物実測図4



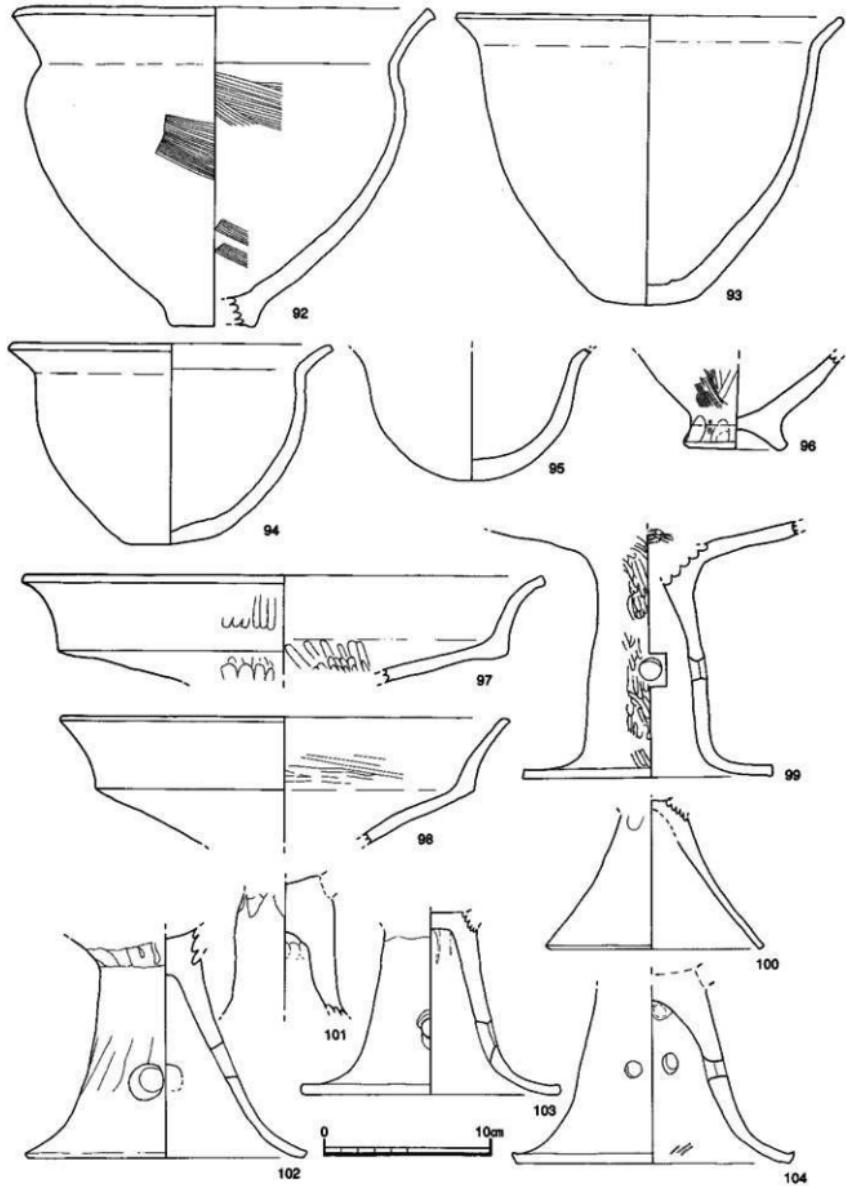
第12図 出土遺物実測図5



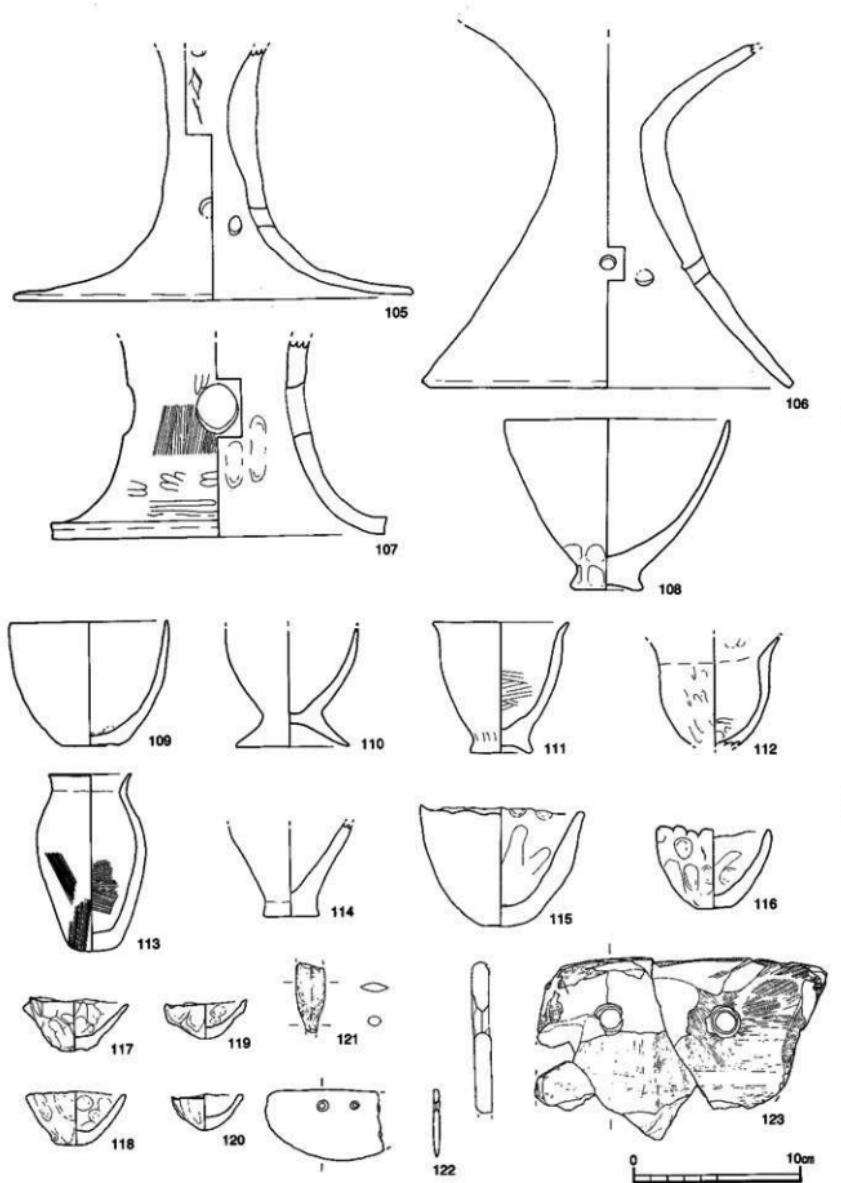
第13図 出土遺物実測図6



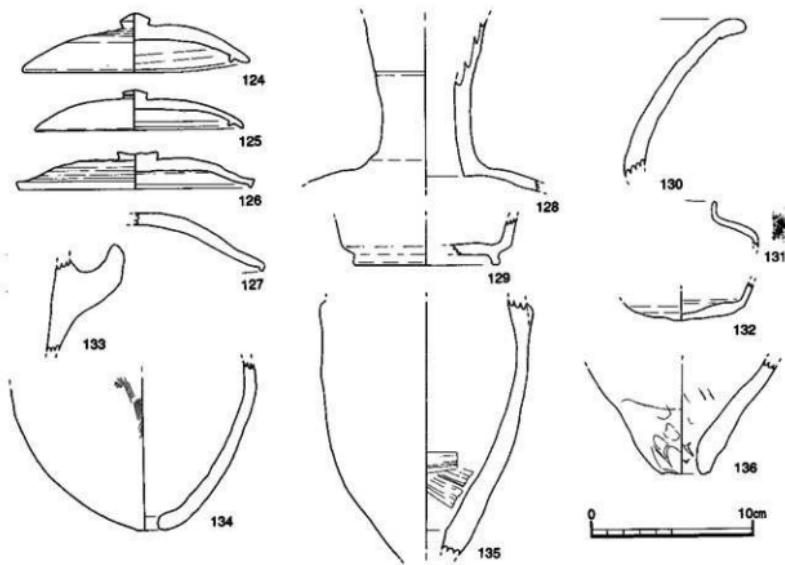
第14図 出土遺物実測図7



第15図 出土遺物実測図 8



第16図 出土遺物実測図9



第17図 出土遺物実測図 10

二月田遺跡 出土土器観察表 1

遺物 番号	器種 部位	法 量			調 整		色 調		胎 土	備 考
		口 径	器 高	底 径	外 面	内 面	外 面	内 面		
1	壺	17 cm	5.3 cm	10 cm	丁寧なナデ	丁寧なナデ	淡黄橙	灰白 淡黄橙	3 mm以下の粒を 少量含む	
2	・			7.2 cm	丁寧なナデ	丁寧なナデ	暗い黄橙 灰黄褐色	暗い橙	3.5 mm以下の微 細粒を含む	
3	・			7.5 cm	ナデ	ナデ	灰白	淡黄橙	1 mm以下の粒を 少量含む	
4	・			5.9 cm	ナデ	丁寧なナデ	暗い橙	暗い橙	微細粒をごく少 量含む	
5	・	16.6 cm	5.7 cm	6.5 cm		ナデ	黄橙	黄橙	1.8 mm以下の砂 粒を多く含む	沈線
6	・			7.0 cm	ナデ	ナデ	灰白	淡黄橙	2 mm以下の粒を ごく少量含む	
7	・			6.4 cm	ナデ	ナデ	橙	橙	砂粒を含む	沈線 指痕痕が残る
8	・			7.0 cm	丁寧なナデ		橙	橙	1 mm以下の粒を 含む	高台高 0.4 cm
9	・			6.2 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	3 mm以下の粒を 含む	高台高 0.4 cm
10	・			8 cm	丁寧なナデ	丁寧なナデ	橙	橙	ごく微量含む	高台高 0.5 cm
11	・			6.8 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	3 mm以下の砂粒 を含む	高台高 0.9 cm
12	・			7.4 cm			淡黄橙	淡黄橙	2 mm以下の砂粒 を多く含む	高台高 1 cm 指おさえ
13	・			6.7 cm	丁寧なナデ	丁寧なナデ	橙	橙	微量含む	高台高 0.8 cm
14	・			7.0 cm	ヘラ削り 横ナデ		淡黄橙	暗い橙	1 mm以下の細砂 粒を含む	高台高 0.6 cm 指おさえ
15	・			7.8 cm	丁寧なナデ	ヘラ ハケ目	橙	橙	1 mm以下の細砂 粒を含む	高台高 1.2 cm
16	・				横ナデ	ナデ	橙	橙	2 mm以下の微細 粒を含む	高台高 0.5 cm + a
17	瓶				丁寧なナデ		橙	橙	3 mm以下の微細 粒を含む	牛角把手
18	・				ナデ	ナデ	暗い橙	暗い橙	4 mm以下の砂粒 を多く含む	指おさえ
19	・				ナデ	ナデ	橙	橙	2.5 mm以下の砂 粒を多く含む	指おさえ
20	支脚				削り		暗い橙 暗い赤橙		3.5 mm以下の細 砂粒を多く含む	
21	蓋				回転ヘラ削り ナデ	回転ヘラ削り ハケ目、ナデ	灰白	灰白	1 mm以下の細砂 粒を微量含む	
22	・				ヘラ削り ナデ	ハケ目 ナデ	灰	灰	0.1 mm以下の粒 を少量含む	
23	・				ハケ目 ナデ		灰	灰	0.4 mm以下の粒 を含む	

二月田遺跡 出土土器観察表2

遺物番号	器種部位	法 量			調 整		色 調		胎 土	備 考
		口 径	器 高	底 径	外 面	内 面	外 面	内 面		
24	瓶	16 cm	5.7 cm	7.4 cm	ナデ	ナデ	灰	灰	3 mm以下の微細粒を少量含む	高台高 0.8 cm
25	壺	10.6 cm			ナデ	横ハケ目 ナデ	灰白	灰白	0.1 mm以下の粒を含む	
26	甕	18.4 cm			叩き(格子目) ナデ	叩き(格子目) ナデ	灰	灰	細砂粒をわずかに含む	
27	々				叩き(格子目) ナデ	ナデ 横ハケ目	灰	灰	微細粒を微量含む	
28	々				横ナデ	横ナデ ハケ目	灰	灰	微細粒を微量含む	沈殿、撫道波状文 貝殻殻縁による剥失文
29	高坏				ハケ目 ナデ	ナデ	灰	灰	1.2 mm以下の砂粒を多く含む	透し
30	壺	6.9 cm	14.2 cm	2.8 cm	ナデの後 ハケ目	ナデ	黒褐色 暗い赤褐	黒褐色 暗い赤褐	3 mm以下の砂粒を多く含む	広口壺
31	々	10.7 cm			ナデ		暗い橙	暗い橙	2 mm以下の砂粒を含む	広口壺
32	々	14 cm					橙	黄灰	細砂粒を含む	広口壺
33	々	24.1 cm			ナデ	横ナデ	橙	暗灰	3 mm以下の砂粒を多く含む	広口壺
34	々	8.4 cm			丁寧なナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	4 mm以下の砂粒を少量含む	広口壺
35	々	17.9 cm	44.5 cm	5.2 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	3 mm以下の砂粒を多く含む	広口壺 底部ヘラ切り
36	々	7.2 cm			横ナデ	ナデ	橙	褐灰 橙	3 mm以下の砂粒を含む	短頸壺
37	々	6.6 cm			縦ハケ目 横ナデ	横ナデ	暗い橙	黄橙	2 mm以下の砂粒を含む	短頸壺
38	々	12.4 cm			ハケ目 ナデ	ナデ	橙	暗い橙	砂粒を多く含む	短頸壺
39	々	14.5 cm	30.7 cm	4.0 cm	丁寧なナデ ヘラナデ	丁寧なナデ ヘラナデ	橙	橙	3 mm以下の砂粒を含む	スス付着 長頸壺
40	々	11.3 cm	31.5 cm	4.8 cm	丁寧なナデ ヘラナデ	ヘラナデ	淡黄橙 明褐	橙 黒褐色	3 mm以下の砂粒を含む	スス付着 長頸壺
41	々	10.5 cm			丁寧なナデ 横ナデ	ナデ	明赤褐 灰褐色	明赤褐 灰褐色	4 mm以下の砂粒を含む	長頸壺
42	々	13 cm			研磨 ハケ目		淡黄橙	淡黄橙	3 mm以下の砂粒を含む	長頸壺
43	々	11.6 cm			ナデ	ナデ	橙	暗い橙	0.3 mm以下の砂粒を微量含む	二重口綠壺
44	々	10.1 cm			丁寧なナデ 横ナデ	丁寧なナデ 横ナデ	暗い黄橙	暗い黄橙	微細な粒子を含む	二重口綠壺
45	々	13.6 cm			横ナデ	横ナデ	橙	橙	4 mm以下の砂粒を多く含む	二重口綠壺
46	々	13.7 cm			ハケ目 丁寧なナデ	ハケ目 丁寧なナデ	暗い橙	暗い橙	0.1 mm以下の砂粒を多く含む	撫道波状文 二重口綠壺

二月田遺跡 出土土器観察表3

遺物 番号	器種 部位	法 量			調 整		色 調		胎 土	備 考
		口径	器高	底径	外 面	内 面	外 面	内 面		
47	壺	14.2 cm			ナデ ハケ目	ハケ目	暗い黄橙	暗い黄橙	2 mm以下の砂粒 を多く含む	撚織波状文 二重口縁壺
48	◆	16.8 cm			ナデ	ナデ	橙	黄灰	5 mm以下の砂粒 を多く含む	二重口縁壺
49	◆	13.9 cm			ナデ		灰褐色	灰褐色	3 mm以下の砂粒 を多く含む	二重口縁壺
50	◆	19.1 cm					灰褐色	暗い黄褐	5.5 mm以下の砂粒 を多く含む	二重口縁壺
51	◆	13.6 cm	18.1 cm	1.0 cm			灰褐色	灰	細砂粒を多く含む	壺型壺
52	◆	25.4 cm			横ナデ、研磨 ハケ目		橙	暗い黄橙	4 mm以下の粒を 多く含む	壺型壺
53	◆	14.6 cm	11.6 cm	3.6 cm		横ナデ ハケ目	橙	橙	4 mm以下の砂粒 を多く含む	黒斑 鉢型壺
54	◆	15.9 cm			丁寧なナデ	ナデ	暗い橙	暗い橙	2.5 mm以下の砂粒 を多く含む	鉢型壺
55	◆	10.9 cm					橙	橙	4 mm以下の砂粒 を多く含む	壺型壺
56	◆			4.0 cm	ナデ	ナデ	橙・褐色	橙・褐色	4 mm以下の砂粒 を多く含む	黒斑
57	◆				ナデの後 ハケ目	ナデの後 ハケ目	淡橙	黒	3 mm以下の砂粒 を多く含む	
58	◆				研磨	ナデ	橙	黒・褐灰	3 mm以下の砂粒 を含む	
59	◆				ナデの後 ハケ目	ナデの後 ハケ目	淡黄橙	暗い橙 褐灰・黒	4 mm以下の砂粒 を含む	黒斑
60	◆			3.8 cm	研磨、丁寧な ナデ、横ナデ	ナデ	橙	黒	4 mm以下の砂粒 を含む	スス付着
61	◆			3.4 cm	ナデ、研磨	ナデ	淡橙色	淡橙色	細砂粒を多量に 含む	底部ヘラ記号 黒斑
62	◆			3.1 cm	ハケ目 ナデ		暗い橙	灰白	3 mm以下の砂粒 を含む	黒斑
63	◆					ナデ	橙	橙・黒褐 褐灰	3.2 mm以下の砂粒 を多く含む	
64	◆			1.3 cm	ハケ目 ナデ		暗い黄橙	黄灰	細砂粒を多く含む	黒斑
65	◆			3.7 cm	研磨	研磨	暗い橙	暗い橙	3 mm以下の砂粒 を少量含む	
66	◆			4.3 cm	丁寧なナデ ハケ目	ナデ	暗い橙	黒	3 mm以下の砂粒 を含む	スス付着 底部ヘラがき
67	◆			4.0 cm		ナデ	暗い橙 灰	暗い黄橙	3 mm以下の砂粒 を少量含む	
68	◆			1.2 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	褐灰	3 mm以下の砂粒 を少量含む	黒斑
69	◆			0.8 cm	ナデ		暗い橙	暗い橙	6 mm以下の砂粒 を多く含む	

二月田遺跡 出出土器観察表4

遺物番号	器種部位	法量			調整		色調		胎土	備考
		口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面		
70	壺			0.5cm			暗い橙	暗い黄橙	砂粒を多く含む	
71	々			1.0cm	ハケ目 ヘラナデ	ハケ目 ヘラナデ	暗い黄橙	黒	3.2mm以下の細砂粒多くを含む	
72	壺	13.7cm			丁寧なナデ ハケ目	横ナデ	暗赤褐色	灰褐色	3mm以下の砂粒を多く含む	貼付突帯
73	々	20.5cm			ナデ	ヘラナデ	灰褐色	灰黄褐色	砂粒を多く含む	貼付突帯
74	々	24.9cm	32.5cm	6.2cm	ハケ目 ナデ		淡黄橙 褐灰	淡黄橙 褐灰	5mm以下の砂粒を多く含む	
75	々	23.0cm			横ナデ		灰黄褐色	暗い橙	砂粒を多く含む	刻目突帯
76	々	30.9cm			ナデ	ナデ	暗い橙	暗い橙 褐灰	4mm以下の砂粒を多く含む	刻目突帯 黒斑
77	々	22cm	20.6cm	2.8cm	ハケ目	ナデ ハケ目	褐灰黒	暗い橙	4.5mm以下の砂粒を多く含む	黒斑、スス付着 底部ヘラ印
78	々			4.0cm	丁寧なナデ	丁寧なナデ	暗い黄橙	淡黄橙	1mm以下の細砂粒を多く含む	黒斑
79	々	18.4cm	18.9cm	5.0cm	ナデ	ナデ	暗い橙	淡黄橙	砂粒を多く含む	
80	々	16.5cm			ハケ目 横ナデ		黄橙	橙	4mm以下の砂粒を含む	スス付着
81	々	40cm					橙	橙	3mm以下の砂粒を多く含む	
82	々	23.6cm			叩き		暗い橙	暗い橙	4.5mm以下の砂粒を多く含む	
83	々	15.6cm			ナデ	ハケの後 ナデ	暗い褐色	暗い橙	砂粒を多く含む	
84	々			7.8cm	ナデ	ナデ	暗い黄橙	淡黄橙	1~2mmの黒灰褐色の砂粒を含む	
85	々			5.3cm	ナデ	ナデ	橙	橙	2mm以下の灰色・灰白色・黒の砂粒を含む	
86	々			6.5cm	ナデ	ナデ	暗い橙	灰白	5mm以下の砂粒を多く含む	
87	々			5.7cm	ハケ目 ナデ	ナデ	暗い褐色	橙	5mm以下の砂粒を多く含む	
88	々			6.5cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	灰白	2mm以下の砂粒を多く含む	
89	々			5.5cm		ナデ	褐灰	暗い橙 黒褐	5mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
90	々			6cm	ナデ	ナデ	黄橙	淡黄橙 明褐灰	6mm以下の砂粒を多く含む	
91	々			5.9cm			橙 灰色	橙 灰色	5mm以下の砂粒・砂粒を多く含む	スス付着
92	鉢	25.4cm	19.2cm	5.1cm	ハケ目	ナデ	橙・暗い褐色・黒色	暗い橙 黒色	2mm以下の砂粒を多く含む	

二月田遺跡 出土土器観察表5

遺物番号	器種部位	法 量			調 整		色 調		胎 土	備 考
		口 径	器 高	底 径	外 面	内 面	外 面	内 面		
93	鉢	23.2 cm	17.5 cm	5.0 cm	ナデ	ナデ	淡赤・橙	暗い橙	砂粒を多く含む	
94	◆	19.3 cm	12.1 cm	5.5 cm	ヘラナデ	ヘラナデ	暗い黄橙	暗い黄橙	砂礫・砂粒を含む	
95	◆				ナデ	ナデ	橙・灰褐	橙・灰褐	3 mm以下の砂粒を含む	
96	◆			5.9 cm	ナデ	ナデ	暗い橙	淡黄橙	砂礫・砂粒を含む	
97	高坏	31.3 cm			ナデ	ナデ	暗い橙	灰褐色	4 mm未満の砂粒を含む	
98	◆	26.7 cm				ナデ	橙・黑褐	黒暗い橙	3 mm以下の砂粒を含む	
99	◆			15.1 cm	研磨 機ナデ	ナデ	暗い橙	暗い橙・褐灰	7.5 mm以下の砂・砂粒を含む	
100	◆			12.5 cm			橙・黒黄灰	橙・黒黄灰	砂粒を多く含む	一部指頭痕が残る
101	◆			4.1 ~ 4.6 cm			明褐灰	明褐灰	3 mm以下の砂礫・砂粒を含む	一部指頭痕が残る
102	◆			16.5 cm	丁寧なナデ	丁寧なナデ	橙	橙	3 mm以下の粒をわずかに含む	
103	◆			15.2 cm		ナデ	暗い橙	暗い橙	微細な粒子を少量含む	
104	◆			16.3 cm	ナデ	ナデ	橙	灰白暗灰	1 mm以下の細砂粒を含む	
105	器台			24 cm	ナデ		橙	橙	5 mm以下の砂礫・砂粒を多く含む	指頭痕・円形透かし
106	◆			22 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	2 mm以下の砂粒を多く含む	円形透かし
107	◆			20 cm	ハケ目	ハケ目	橙	橙・黒	2 mm以下の砂粒を多く含む	指頭痕・円形透かし
108	小型土器	13.6 cm	3.8 cm	10.4 cm	ヨコナデ		淡黄橙	淡黄橙・灰色	2 mm以下の細砂粒を多く含む	鉢
109	◆	9.5 cm	7.5 cm	4 cm	ナデ	ナデ	橙・灰	灰褐色	細砂粒を多く含む	一部指頭痕が残る。鉢
110	◆			6.8 cm	丁寧なナデ		暗い橙	灰黄	3 mm以下の砂粒を含む	鉢
111	◆	8.1 cm	8.9 cm	3.7 cm	ナデ		灰黄褐	暗い黄橙	2 mm以下の砂粒を含む	壺・スス付着
112	◆				ナデ		暗い橙	暗い橙・黒斑	3 mm以下の粒を多く含む	鉢
113	◆	4.9 cm	10.7 cm	2.5 cm 2.9 cm	ヘラナデ	ヘラナデ	橙・黒	橙・黒・灰	3 mm以下の砂粒を多く含む	壺
114	◆			3.4 cm	ナデ	ナデ	暗い橙	灰	1 mm以下の細砂粒を含む	壺
115	◆	9.9 cm	7.3 cm	2.2 cm		ナデ	暗い黄橙	暗い黄橙	3 mm以下の粒を含む	鉢・スス付着

二月田遺跡 出土土器観察表 6

遺物 番号	器種 部位	法 量			調 整		色 調		胎 土	備 考
		口径	器高	底径	外 面	内 面	外 面	内 面		
116	手捏 土器	6.9 cm	5 cm	2 cm	ナデ	ナデ	暗い橙 黄灰	暗い橙 黄灰	3 mm以下の砂粒 を含む	指頭痕明瞭
117	タ	5.6 cm	2 cm	2 cm		ハケ目	暗い橙	暗い橙	4 mm以下の繊・ 砂粒を多く含む	指頭痕明瞭
118	タ	6 cm	3.3 cm	1.5 cm	ナデ	丁寧なナデ	橙・黒	橙	3 mm以下の砂粒・ 砂粒を含む	指頭痕明瞭
119	タ	5 cm	3.1 cm	0.9 cm		ナデ	灰白・黒	灰白	2 mm程の砂粒と 細砂粒を含む	指頭痕明瞭
120	タ	4.3 cm	2.0 cm			ナデ	暗い橙 灰色	暗い橙	4 mm以下の繊・ 砂粒を多く含む	指頭痕明瞭
124	蓋	14.2 cm	3.7 cm		ヘラ削り	ナデ	暗青灰 赤灰	赤灰	3 mm以下の砂粒 を含む	
125	タ	12.8 cm	2.4 cm		ナデ	ナデ	灰	灰	微細な粒をわざ かに含む	
126	タ	14.3 cm	2.1 cm		ヘラ削り	ヘラ削り	褐灰	褐灰	3 mm以下の砂粒 を含む	
127	タ				ナデ	ナデ	灰色	灰色	0.1 mm以下の粒 をわざかに含む	
128	長頸瓶				ナデ	ナデ	灰	灰	2 mm以下の粒を わざかに含む	
129	壺			9.0 cm	ナデ	ナデ	灰	灰	2 mm以下の粒を わざかに含む	高台高 0.7 cm
130	壺				ナデ	ナデ	黄灰	灰褐色	2 mm以下の砂粒 を多く含む	
131	短頸壺				ナデ	ナデ	灰 暗灰黄	灰	細砂粒をわざか に含む	
132	タ						灰	灰	1 mm以下の粒を わざかに含む	
133	瓶						橙	橙	0.3 mm以下の細 砂粒を多く含む	牛角把手
134	タ				ハケ目	ナデ	橙	褐灰	3 mm以下の砂粒 を多く含む	スス付着
135	タ					ハケ目	暗い橙 黒斑	橙	0.1 mm以下の砂 粒を多く含む	
136	タ			2.8 cm	ヘラナデ	ヘラナデ	暗い黄橙	暗い黄橙	2 mm以下の砂粒 が多く含まれる	

二月田遺跡 出土石器観察表

番号	器種	最大長	最大幅	最大厚	重 量	石 材	備 考
121	磨製 石鎌	4.0 + a cm	1.73 cm	0.52 cm 0.62 cm	4.92 g	粘板岩	刃部・茎部欠損
122	石庖丁	4.3 cm	6.8 cm	0.45 cm	20.22 g	粘板岩	欠損
123	石鎌	10.7 + a cm	16.5 cm	1.0 cm	270 g	粘板岩	刃部欠損

第3章 芋字遺跡の調査

第1節 調査の概要（第2図）

芋字遺跡は、以前桑畠であった部分をA区、櫟林の東部をB区、同西部をC区、丘陵上をD区、水田部をE区とした。

A区では、溝状遺構と土師器を検出した。

B区では、丘陵裾部の段状整形痕と縄文土器、土師器、須恵器を検出した。

C区では、水路状の大型の水穴と須恵器、土師器を検出した。

D区では、小型の二段掘土壙と供獻土器と思われる弥生時代終末期の土器を検出した。

E区では、多くのピット、溝状遺構と須恵器、土師器を検出した。

第2節 遺構と遺物

1. 遺構について（第18～24図）

A区は、東側と南側を丘陵斜面に接しており、西側はB区に北側は水田に面している。このため全体としては北西に傾斜した形となっているが、中央部はやや窪んだ形になっており、地下の水路になっているため陥没した跡が2ヵ所に見られる。

基本層序は表土（耕作土）、黒色土層、黄色土（地山）であるが、北側に行くに連れて黒褐色土層、黄色地山破碎層が表土と黒色土層の間に次第に厚く入るようになる。

溝状遺構は東側斜面の上部に南北方向に走っており、幅1.8～1m、南側の深さ90cmで、北側は削平のため殆ど立上りが見られない、段状の遺構であるが性格は不明である。

遺物の殆どは黒褐色土層からの出土で遺構に伴うものではない。

B区は、A区とC区の間で南は丘陵、北は水田に面している。当初平坦な畠と考えていたが、実際には北側は堆積土であり、結果的に丘陵部の整形痕を検出した。整形痕は調査区北東角から南西角へ対角線に過ぎるものと、調査区西側を南北に並行して走る2つの段状遺構である。対角線の整形痕は丘陵中部の斜面に平坦面を造った際のものと考えられ、段状遺構は1mの間隔を置き、上段が高さ10cm程で下段が高さ20cm程の段々畠的なものである。

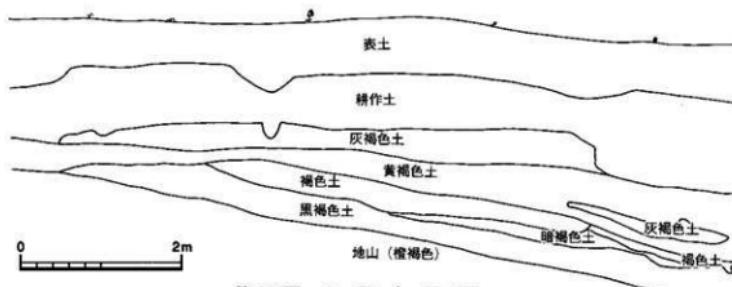
調査区東側に柱穴状のピットが $2\text{m} \times 2.5\text{m}$ と3mと不規則に並んでいる。

C区では、水路状の大型の水穴を検出し、その陥没部には幅1.5m、長さ5m、深さ1mのもの（1号水穴）と幅1m、長さ2m、深さ1mのもの（2号水穴）が見られ、粘土の中に多くの土器が圧縮された形で出土した。

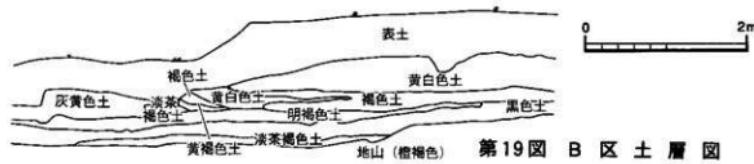
D区では、旧地形における幅8m、長さ20mの丘陵鞍部の中央部に上段が $2 \times 0.9\text{m}$ で深さ15cm、下段が $1.5 \times 0.3\text{m}$ で深さ25cmの小型の二段掘土壙を検出した。遺構からの出土遺物は無く、鞍部内の黒色土から弥生土器が出土している。

E区は、C区から50m斜面沿いに北に行った段状の水田部で、西から東に向かって傾斜している。

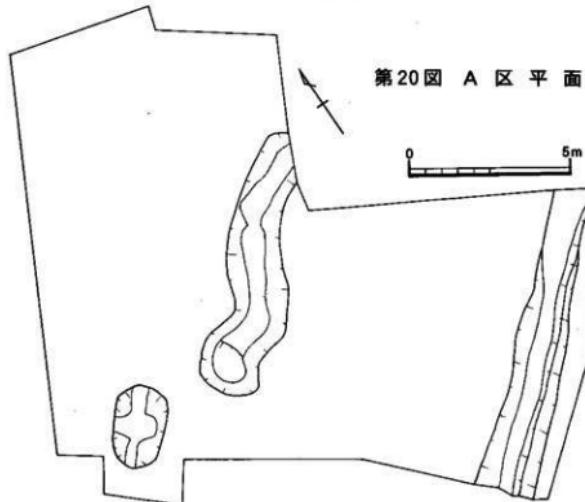
地山斜面に沿って土器が破碎した状態で出土している。斜面は2m程度の間隔で緩やかにうねった浅い溝状遺構の様になっているが、埋土、地山等は粘土である。大型のピットが多く検出されたがその性格は不明である。



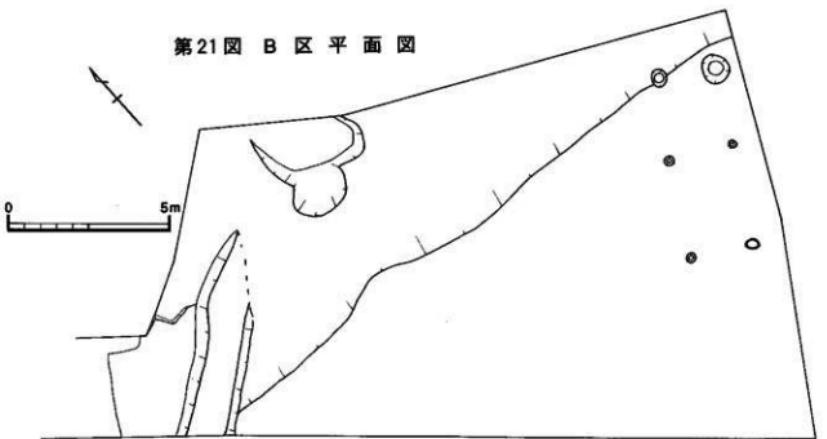
第18図 A区 土層図



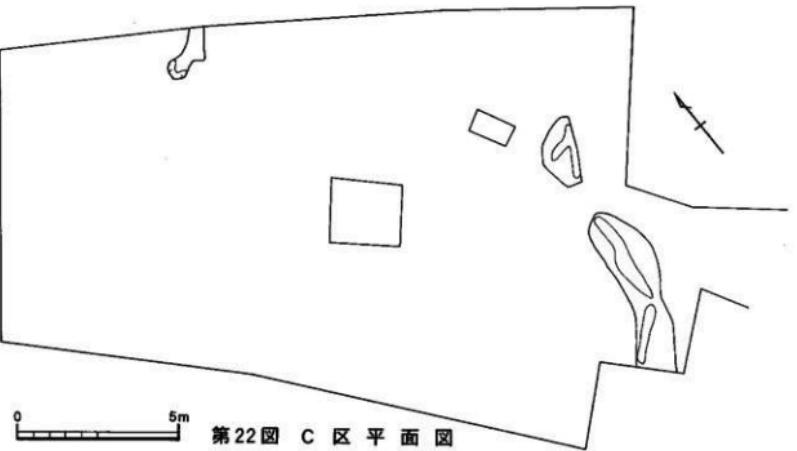
第19図 B区 土層図



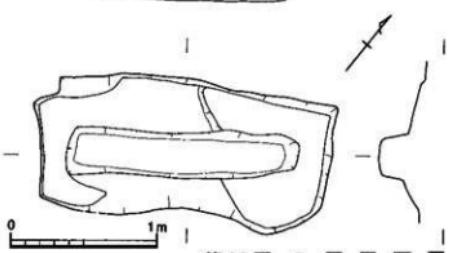
第21図 B区平面図



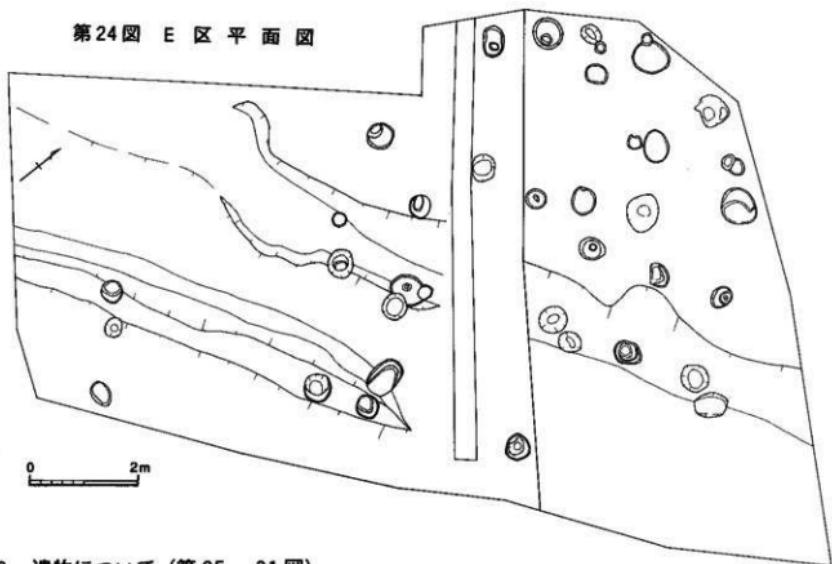
第22図 C区平面図



第23図 D区平面図



第24図 E区平面図



2. 遺物について（第25～31図）

A区（第25図、1～18）

土師器

1～16は壺である。1～5は底部中央が盛上がり底部から体部へ直線的に伸びる壺で、5は口唇部が外反する。6～9は体部と底部の境が明瞭で段状になる壺である。10は所謂充実した高台である。11～16は高台付きの壺で、12、13は底部中央まで傾斜しており、14は底部中央が肥厚する。17は器台になると思われ、18は器台か高壺の脚であろう。

B区（第26図、19～28）

19は山形口縁に口唇部と頸部に刻目突帯を持ち、突帯間に細い並行沈線で山形文を施す孔列土器、20は刻目突帯を持つ壺、21は布痕土器の体部から口縁部、22、23は底部から体部へ直線的に伸びる壺で、24は体部と底部の境に段を持つ壺、25は低い充実した高台の壺である。26は黒色土器で、体部が低く開く高台付き椀である。27、28は須恵器で、27は高台付き椀の一部、28は小型の壺と思われ肩部にヘラ記号を持つ。

C区（第27～29図 29～85）

1号水穴上層（29～45）

土師器

29～32は壺で、29～31の器形は近いが口縁部から頸部の内面形態がそれぞれ異なっている。33～37は底部から体部へ直線的に伸びる壺で、38、39は体部と底部の境に段を持つ壺、40は円盤状の高台の椀、41は充実した高台の壺である。42～45は高台付き壺で、43、44は底部径が広く高台が長く伸びるものと思われる。

1号水穴下層（46～71）

土師器

46～50は底部から体部へ直線的に伸びる坏、51～55は体部と底部の境に段を持つ坏である。56、57は充実した高台の坏である。58～66は高台を持つ坏で、58、59は底部が中央へ傾斜したもの、66は高台が長く伸びた脚状のものとなっている。71は強く外反する口縁を持つ壺である。

黒色土器

67は体部と底部の境に段を持つ坏である。68は高台付き椀で、半球状を呈し底部外面は波打っている。69は高台付き坏で、口縁部を僅かに外反させ底部中央が厚くなり、高台はハの字に広く開く。

須恵器

70は高台付きの坏で、口縁部をやや外反させ、口縁端を丸く収める。

包含層出土土器（72～85）

土師器

72、73は底部から体部へ直線的に伸びる坏、74、75は体部と底部の境に段を持つ坏である。76～80は高台を持つ坏で、76、77は底部中央が窪んだ形になり、80は底部外面に花弁状の指頭痕が残っている。81は口縁部内面を肥厚させる鉢、82は厚い脚の付く椀、83は脚と体部離日の直下に透しの有る鉢の脚部。84は布痕土器の胴部である。

須恵器

85は底部と体部の境に面を持つ鉢と思われるが、高台付きの瓶の高台が欠損したものとも思われる。

D区（第30図 86、87）

弥生土器

86は高坏の坏部で、屈曲部に明瞭な段を持ち、直立気味に立上がった後外反する。87は高坏の裾端部である。

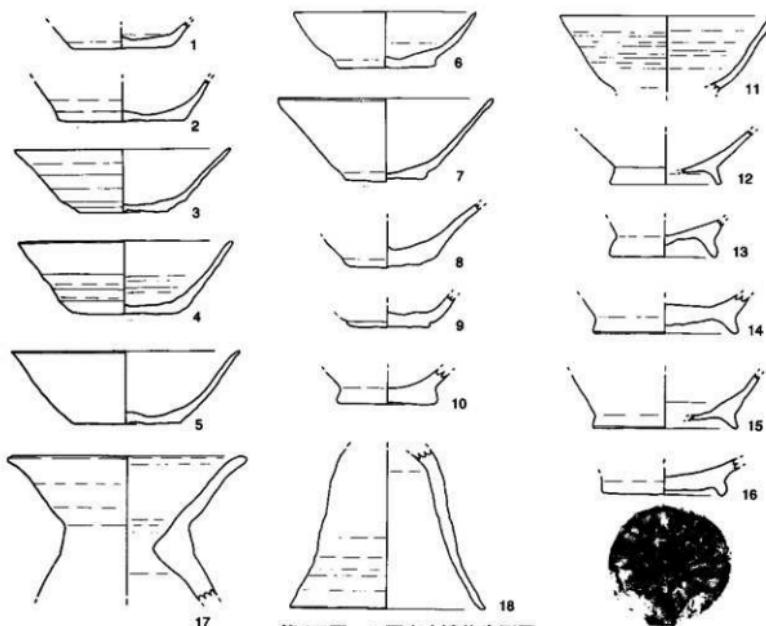
E区（第31図 88～107）

土師器

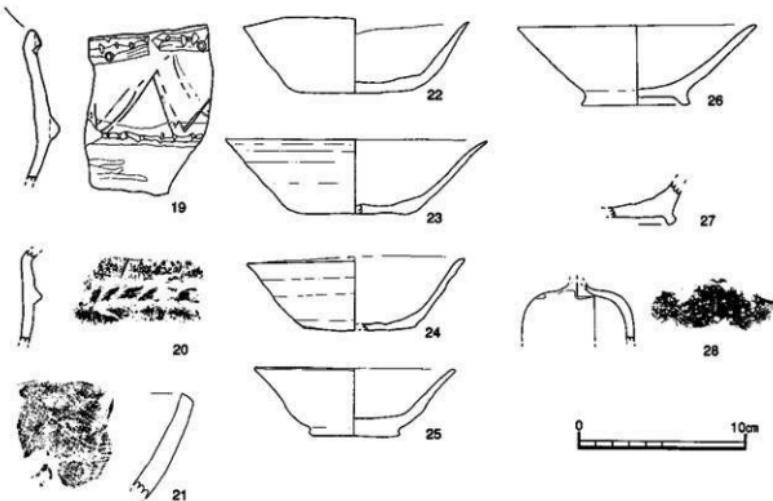
88～94は底部から体部へ直線的に伸びる坏、95は体部と底部の境に段を持ち、96は充実した高台の坏である。97～100は高台付きの坏で、99と100は脚状の台が付く。101～103は壺で胴部の開きがそれぞれ異なっている。104は瓶の牛角把手である。

須恵器

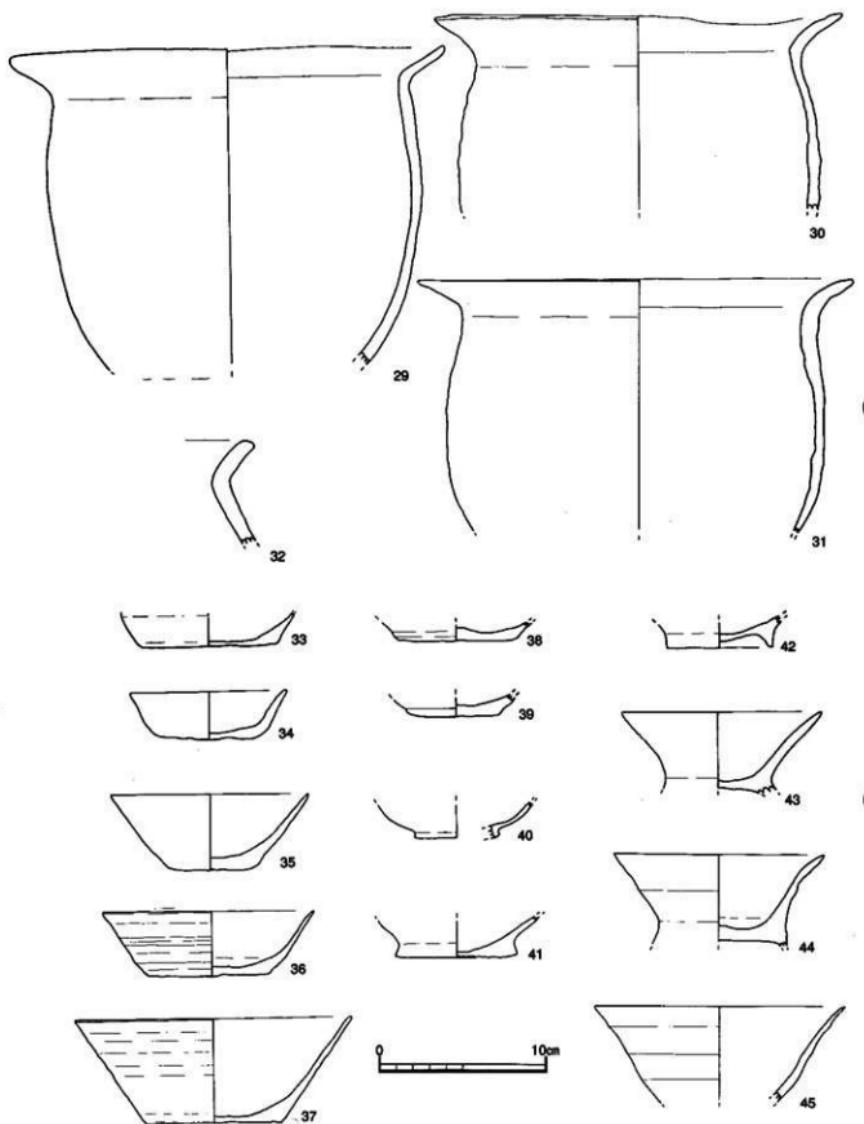
105は壺の口縁部、106は扁平気味の天井部と口唇部を外反させて丸くする蓋、107は坏の底部である。



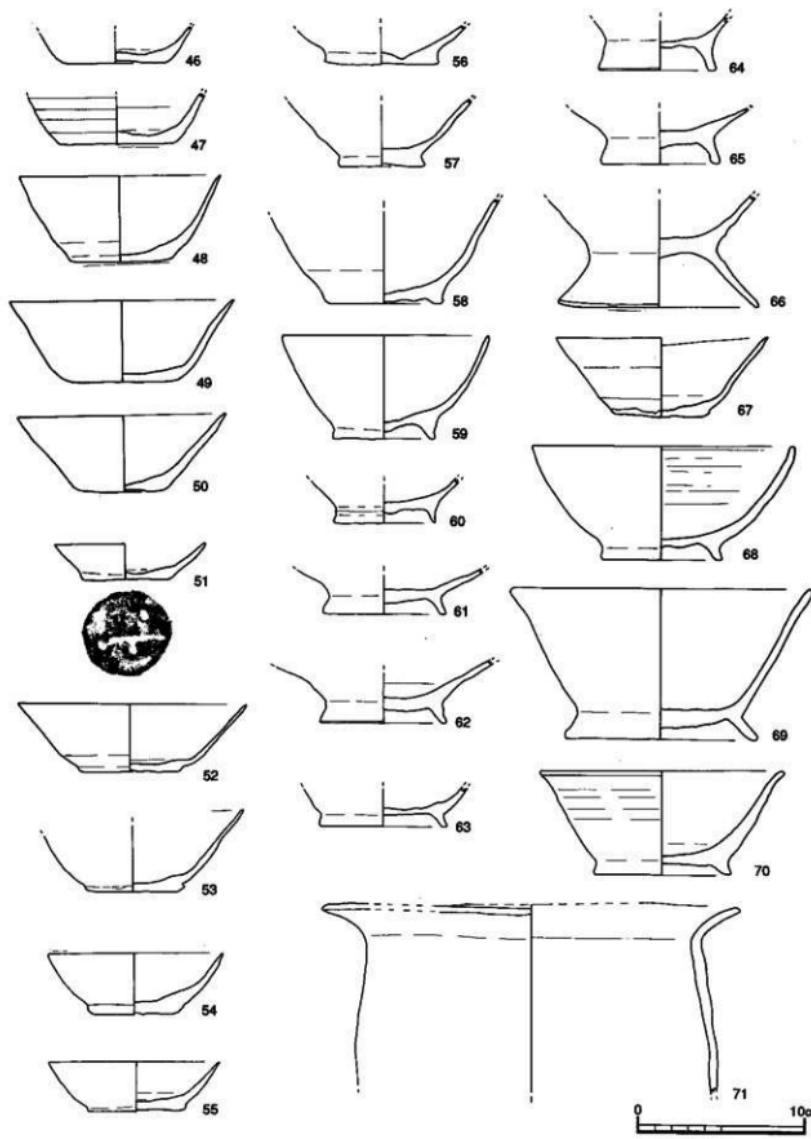
第25図 A区出土遺物実測図



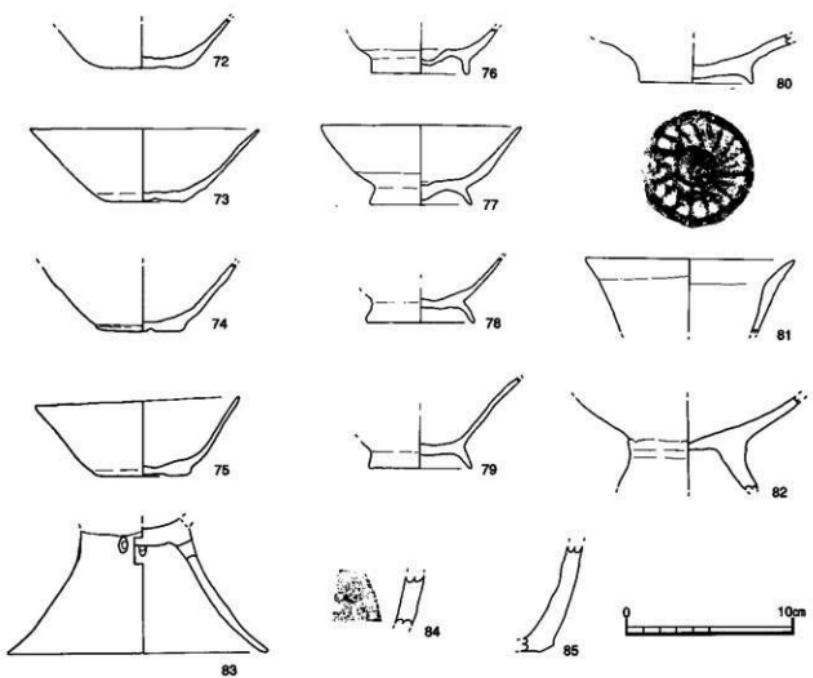
第26図 B区出土遺物実測図



第27図 C区出土遺物実測図1



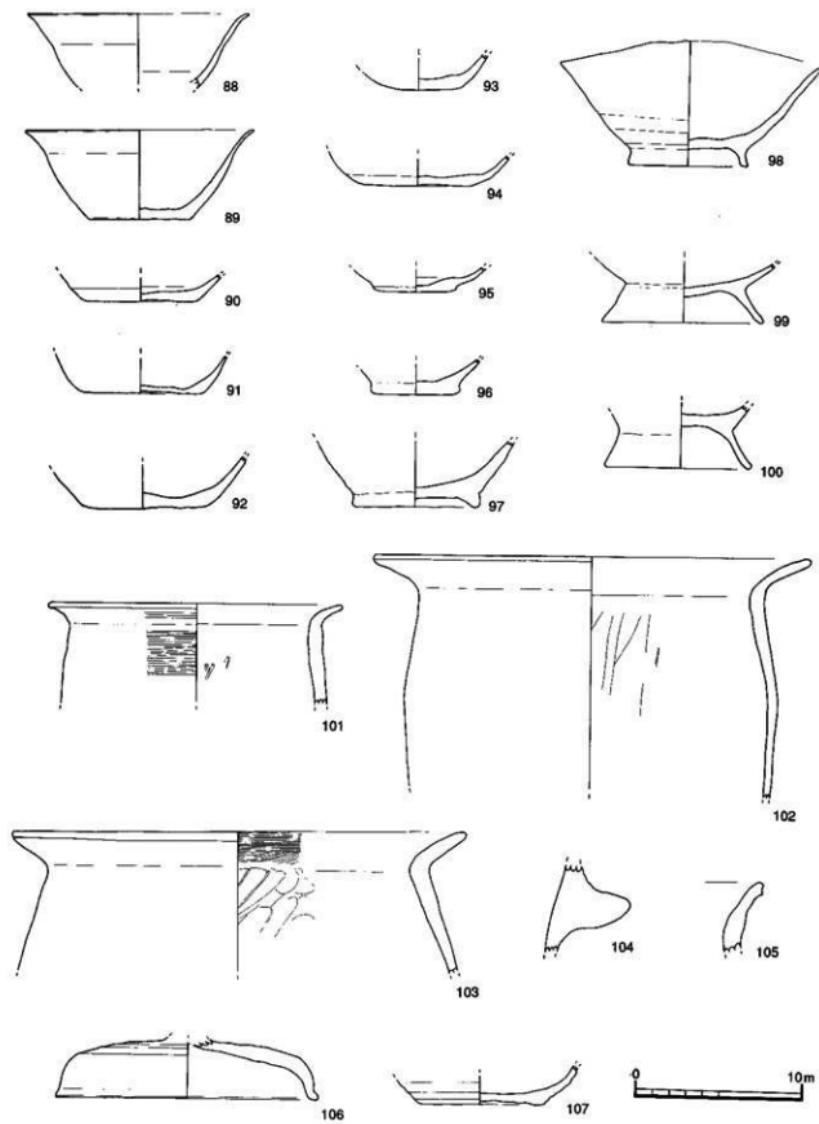
第28図 C区出土遺物実測図2



第29図 C区出土遺物実測図3



第30図 D区出土遺物実測図



第31図 E区出土遺物実測図

芋字遺跡 出土土器観察表 1

遺物番号	器種部位	法 量			調 整		色 調		胎 土	備 考
		口径	器高	底径	外 面	内 面	外 面	内 面		
1	壺			5.5 cm	ナデ	ナデ	橙	灰褐色	2 mm以下の粒をわずかに含む	
2	々			7.0 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	2 mm以下の粒をわずかに含む	
3	々	12.7 cm	3.8 cm	5.3 cm	ヘラ切り 横ナデ	横ナデ	淡黄橙	橙	細砂粒を少量含む	
4	々	12.7 cm	4.4 cm	6.4 cm	横ナデ ヘラ切り	横ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1 mm以下の砂粒を含む	指頭痕あり
5	々	13.7 cm	4.3 cm	6.3 cm	横ナデ ヘラ切り	横ナデ	橙	橙	細砂粒と微細な石英粒を含む	スス付着
6	々	10.8 cm	3.4 cm	6 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	3 mm以下の粒をわずかに含む	
7	々	12.7 cm	5.0 cm	4.8 cm	ナデ		橙	橙	1 mm以下の粒と砂粒を含む	スス付着
8	々			5.6 cm	ナデ ヘラ切り	ナデ	橙	橙 明黄褐色	1 mm以下の粒と2 mm以下の砂粒を含む	
9	々			5 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1 mm以下の粒と砂粒を含む	
10	々			6.0 cm	ナデ	ナデ	橙	橙	細砂粒を少量含む	高台高 1.0 cm
11	々	12.8 cm			ナデ	ナデ	黄橙・橙	橙	0.1 mm以下の細砂粒を微量含む	高台高 0.6 cm + a
12	々			6.5 cm	横ナデ	ナデ	橙	暗い橙	1 mm以下の砂粒を少量含む	高台高 0.7 cm
13	々			6.5 cm	丁寧なナデ	丁寧なナデ	淡黄橙	暗い橙	3 mm以下の粒と2 mm以下の砂粒を含む	高台高 0.7 cm
14	々			8.8 cm	横ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	細砂粒を含む	高台高 0.5 cm
15	々			8.6 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	細砂粒を含む	高台高 0.5 cm
16	々			7.2 cm	ナデ	ナデ	橙	淡黄橙	1 mm以下の粒と2 mm以下の砂粒を含む	高台高 0.3 cm 指頭痕
17	器台	13.9 cm			ヘラナデ	ヘラナデ	橙	橙	1 mm以下の砂粒を少量含む	
18	々			11.8 cm	ナデ	ヘラナデ	橙	橙	1 mm以下の砂粒と石英粒をわずかに含む	
19	孔列土器				ナデ	ナデ 条痕	明黄褐色	明黄褐色	2 mm以下の粒と3 mm以下の砂粒を含む	刻目突帯がある
20	甕				ナデ		橙	暗い赤褐色	0.3 mm以下の砂粒を多く含む	刻目突帯がある
21	布痕土器				ナデ	布痕	橙	橙	2 mm以下の粒と4 mm以下の砂礫・砂粒を含む	
22	壺	13 cm	4.4 cm	7.2 cm	ヘラ切り ナデ	ナデ	暗い橙	暗い橙	微細粒のみ多く含んでいる	
23	々	15.7 cm	4.5 cm	7.0 cm	ヘラ切り ナデ	ナデ	橙	橙	砂粒がわずかに微細粒が多く見られる	

芋字遺跡 出土土器観察表2

遺物番号	器種部位	法 量			調 整		色 調		胎 土	備 考
		口 径	器 高	底 径	外 面	内 面	外 面	内 面		
24	壺	12.9 cm	4.0 cm	6.5 cm	横ナデ	ヨコナデ	暗い黄橙	暗い黄橙	0.5 mm以下の粒をやや多量に含む	
25	々	12.0 cm	4.1 cm	4.8 cm	ハケ目・横ナデ ヘラ切り		暗い橙	暗い橙	微量の砂粒と多量の微細粒を含む	
26	椀	14.2 cm	4.8 cm	6.5 cm	ヘラ切り ナデ		暗い黄橙	褐色	粗砂を含む	黒色土器 高台高0.5 cm,スズ付着
27	々				ナデ	ナデ	青灰色	青灰色	1 mm以下の砂粒を含む	高台高0.5 cm
28	壺				ナデ	ナデ	灰色	灰色	微細粒と雲母様の片がわずかに見られる	
29	壺	26.0 cm			ナデ	ナデ	橙	橙	7 mm以下の砂粒と1 mm以下の石英粒を含む	
30	々	24.5 cm					灰白色	灰白色	3.5 mm以下の粒と4 mm以下の砂礫-砂粒を含む	スズ付着
31	々	26 cm			ナデ		灰白色	灰白色	4 mm以下の粒と3 mm以下の砂粒を多く含む	
32	々				ナデ	ナデ	明褐色灰色	明褐色灰色	0.3 mm以下の砂粒と0.2 mm以下の粒が多量に含まれる	
33	壺			8.0 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1 mm以下の粒を含む	
34	々	9.4 cm	2.9 cm	6.3 cm	ナデ	ナデ	橙	橙	3 mm位の粒を含む	
35	々	11.8 cm	4.6 cm	4.7 cm	横ナデ 黒斑あり	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1 mm以下の粒と微量な石英粒をわずかに含む	
36	々	12.8 cm	4.0 cm	7.5 cm	ナデ	ナデ	橙 淡黄橙	橙 淡黄橙	1 mm程度の粒2.5 mm以下の砂粒を含む	
37	々	16.6 cm	6.3 cm	8.0 cm	ナデ	ナデ	橙	橙	1 mm以下の粒を含む	
38	々			6.7 cm	ナデ ヘラ切り	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1 mm以下の細砂粒をわずかに含む	
39	々			5.5 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微量な粒をわずかに含む	
40	椀				ナデ	ナデ	黄橙色	黄橙色	2.5 mm以下の粒を含む	
41	壺			7.2 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙 橙	淡黄橙	2 mm以下の砂粒を含む	
42	々			6.4 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	3 mm以下の砂粒を含む	高台高0.4 cm
43	々	12.0 cm				ナデ	淡黄橙	淡黄橙	0.2 mm以下の粒が微量含まれる	高台高0.4 cm +
44	々	12.5 cm			ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	0.2 mm以下の土の粒を少量含む	高台高0.3 cm +
45	々	15.0 cm			ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	0.2 mm程度の砂粒と幅3 mm長さ6 mm以下の砂粒を含む	高台付?
46	々			6.6 cm	ナデ	ナデ	橙	橙	0.3 mm以上の砂粒と0.7 mm程の粒のたまりが含まれる	

芋字遺跡 出土土器観察表3

遺物番号	器種部位	法 量			調 整		色 調		胎 土	備 考
		口 径	器 高	底 径	外 面	内 面	外 面	内 面		
47	坏			7 cm		ナデ	橙	橙	0.2 mm以下の砂粒と選択 細粒をわずかに含む	
48	々	12.0 cm	5.2 cm	6.0 cm	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	2 mm以下の砂粒 を含む	
49	々	13.5 cm	4.9 cm	6.4 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	砂粒をわずかに 含む	
50	々	12.5 cm	4.6 cm	5.2 cm	ナデ	ナデ	黄橙	黄橙	1 mm以下の細砂粒 をわずかに含む	
51	々	9.0 cm	2.2 cm	5.3 cm			暗い橙	暗い橙	0.1 mm以下の粒 を含む	
52	々	13.7 cm	4.1 cm	6.0 cm			橙	橙	2 mm以下の砂粒 を少量含む	
53	々			5.8 cm	横ナデ	ナデ	橙	淡黄橙	2 mm未満の砂粒 を少量含む	
54	々	10.3 cm	3.8 cm	5.0 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	2 mm以下の粒と微小な 石英粒をわずかに含む	
55	々	10.2 cm	3 cm	6 cm	ナデ	ナデ	橙	橙	0.5 mm以下の砂粒が 入りまじっている	
56	々			6.7 cm			淡橙	淡橙	1 mm以下の砂粒 を少量含む	
57	々			5.2 cm	ナデ	ナデ	橙	橙	3 mm以下の砂礫を 少量と砂粒を含む	
58	々			6.7 cm	ナデ		暗い黄橙	暗い黄橙	3 mm以下の粒を 含む	高台高 0.1 cm
59	々	12.4 cm	6.3 cm	6.0 cm	ナデ		淡黄橙	淡黄橙	3 mm未満の粒を 少量含む	高台高 0.5 cm
60	々			6 cm	ヘラナデ ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	2 mm以下の砂粒 を含む	高台高 0.6 cm 一部に指頭状が残る
61	々			7.3 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	2 mm以下の砂粒 を含む	高台高 0.6 cm
62	々			7.5 cm	ナデ	横ナデ	暗い黄橙	暗い黄橙	2 mm以下の粒を 少量含む	高台高 0.8 cm
63	々			7.5 cm	ナデ		明黄褐色 橙	明黄褐色 淡黄	2 mm以下の粒を 含む	高台高 0.7 cm
64	々			6.8 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	3 mm超の粒を微量 と細砂粒を含む	高台高 1.4 cm
65	々			6.8 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1 mm以下の粒を わずかに含む	高台高 1 cm
66	々			11.5 cm	横ナデ	横ナデ	淡黄橙	淡黄橙	2 mm以下の粒と3 mmを 越える粒を微量含む	高台高 3.0 cm
67	々	12.7 cm	4.8 cm	5.7 cm	横ナデ	横ナデ	褐灰黑 暗い黄橙	褐灰黑 暗い黄橙	1 mm以下の砂粒と微 細な石英粒を含む	スス付着 黒色土器
68	椀	15.7 cm	6.9 cm	7.1 cm	研磨 ヘラ切り		灰白・橙 褐灰	黒	1 mm以下の細砂 粒を多く含む	黒色土器
69	坏	18.0 cm	9.1 cm	11.4 cm	ナデ 横ナデ	ナデ	黑色 褐灰色	黒	3 mm以下の砂、細砂 粒を多く含む	黒色土器

芋字遺跡 出土土器観察表4

遺物 番号	器種 部位	法 量			調 整		色 調		胎 土	備 考
		口径	器高	底径	外 面	内 面	外 面	内 面		
70	壺	14.5 cm	6.3 cm	8.0 cm	ナデ	ヘラナデ ナデ	明褐色	明褐色	7 mm以下の砂粒と2 mm以下の粒を含む	高台高 0.7 cm
71	甕	24.9 cm				ナデ	暗い橙	暗い橙	3 mm以下の砂粒と1 mm以 下の石英粒を微量含む	
72	壺			6.3 cm			暗い橙	橙	3 mm以下の砂粒と0.1 mm 以下の砂粒が多く含む	
73	タ	13.8 cm	4.4 cm	5 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙 橙	淡黄橙 橙	1 mm以下の粒と3 mm 以下の砂粒を含む	
74	タ			5.1 cm	ナデ ヘラ切り	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1 mm以下の砂粒を微量と 0.1 mm以下の砂粒を含む	
75	タ	12.3 cm	4.5 cm	5.6 cm	ナデ ヘラ切り	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1 mm以下の粒と5 mm以下の 砂粒、砂粒をばらに含む	
76	タ			5.8 cm		ナデ	淡黄橙	淡黄橙	3 mm以下の粒を 少量含む	高台高 0.6 cm
77	タ	12.0 cm	5 cm	6.0 cm	ナデ	横ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1 mm以下の粒を 少量含む	高台高 0.3 cm
78	タ			6.4 cm			淡黄橙	淡黄橙	1 mm以下の粒と3 mm以 下の砂粒を少し含む	高台高 0.9 cm
79	タ			6.2 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1 mm以下の粒と5 mm以 下の砂粒、砂粒を含む	高台高 0.8 cm
80	タ			6.8 cm	ナデ	ナデ	黄橙	黄橙	3 mmの砂粒を微量と2 mm 以下の砂粒、粒を含む	高台高 0.3 cm
81	鉢	12.5 cm				ナデ	黄橙	淡黄橙	0.2 mm以下の粒 を微量含む	
82	椀				横ナデ		黄橙	淡黄橙 灰黄	2 mm以下の砂粒 を含む	
83	鉢			15.7 cm	丁寧なナデ	丁寧なナデ	橙	橙	3 mm位の砂粒を微量と0.1 mm以下の砂粒を多量含む	透し、指頭痕あり
84	布痕 土器				ナデ		暗い赤褐色	暗い赤褐色	2 mm以下の砂粒 を含む	
85	鉢				ナデ	ナデ	灰色	青灰色	細かい粒子を含 む	高台付?
86	高壺	33.4 cm			ナデ		黄橙色	黄橙色	2 mm以下の粒と3 mm以 下の砂粒を数多く含む	
87	タ				横ナデ		暗い黄橙色	暗い黄橙色	2 mm以下の粒と 砂粒を多く含む	
88	壺	13.4 cm			ナデ	ナデ	褐灰	褐灰	2 mm以下の粒と細かい 石英粒を微量含む	
89	タ	13.6 cm	5.4 cm	6 cm	ナデ	ナデ	橙	橙	4 mm以下の砂粒 と粒を含む	
90	タ			6.8 cm	ナデ		橙	橙	1 mm未満の粒と微細 な石英粒を少量含む	
91	タ			7.3 cm	ナデ	ナデ	暗い黄橙	暗い黄橙	2 mm以下の粒を 多量に含む	
92	タ			7.3 cm	ナデ	ナデ	橙	橙	1 mm以下の粒を わずかに含む	

芋字遺跡 出土土器観察表5

遺物 番号	器種 部位	法 量			調 整		色 調		胎 土	備 考
		口径	器高	底径	外 面	内 面	外 面	内 面		
93	壺			3.5 cm		ナデ	橙	橙	3 mm以下の粒と石英粒を微量含む	
94	々			6.8 cm	ナデ	ナデ	橙	橙	細かい粒を少量含む	
95	々			4.8 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	2 mm以下の粒とごく細かな石英粒を少量含む	
96	々			5.4 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	灰白	2 mm以下の粒を含む	
97	々			7.5 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	2 mm以下の粒を多く含む	高台高 0.5 cm
98	々	15.8 cm	7.5 cm	7 cm	ナデ	ナデ	橙	橙	2 mm以下の粒を含む	高台高 1.0 cm
99	々			9.6 cm	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	3 mm以下の粒を含む	高台高 1.6 cm
100	々			8.7 cm	ナデ	ナデ	橙	橙	1 mm以下の粒を少し含む	高台高 2.5 cm
101	甕	17.8 cm			ナデ	ハケ目	灰黄褐色	暗い黄橙 灰褐色	3 mm以上の砂礫や2 mm以下の砂粒を含む	
102	々	26.2 cm					暗い橙	灰褐色 橙	2 mm以下の粒と0.5 mm以下の石英粒を少し含む	
103	々	27.3 cm			ハケ目	ナデ	暗い黄橙	暗い黄橙	3 mm以下の砂粒を多く含む	
104	瓶						橙	橙	砂礫や細砂粒と微細な粒も微量含む	牛角把手
105	甕				ナデ	ナデ	灰色	灰色	3 mm以下の砂粒を含む	
106	蓋			15.7 cm	ヘラナデ 丁寧なナデ		灰色	灰色	1 mm程度の砂粒と微細粒が少し含まれる	
107	壺			7.5 cm	横ナデ ヘラ切り	横ナデ	灰色	灰色	1 mm以下の細砂粒を少し含む	

第4章 まとめ

二月田遺跡及び芋字遺跡の時期について

平成7年度調査の二月田遺跡は、出土した須恵器の蓋（21・22・23）の形態から8世紀の前葉から中葉頃、25の壺の口縁部から9世紀後半頃、14の土師器の坏から9世紀後半頃が比定される。平成8年度調査の二月田遺跡は、121の磨製石鎌、72、73の弥生時代中期中葉の壺から98の高坏、108の器台や丸底化した底部に見られる弥生時代終末期までの時期と、須恵器の蓋に見られる124、125の7世紀後葉頃から126の8世紀前半頃の時期に分けられる。

芋字遺跡ではB区の19は繩文時代晚期後半、20は弥生時代終末期である。106の須恵器の蓋は8世紀後半、68、69の黒色土器は9世紀の後半頃、80の坏は9世紀後半頃、67は11世紀に比定されよう。

二月田遺跡は現在水田面であり、過去の圃場整備で上層の包含層が削平されているが、大型の溝状遺構の埋土に古墳時代の遺物は見られず、7世紀後葉以降の遺物が出土していることは、芋字遺跡が丘陵斜面にありながら古墳時代の遺物が出土していないことと一致する。つまり、この両遺跡を中心とする天神川沿いの一帯は、弥生時代中期から終末期を第1期、7世紀後葉以降11世紀代を第2期とするものと考えられる。

二月田遺跡及び芋字遺跡発掘調査の成果と課題について

二月田遺跡では標高10m前後の現在水田として利用されている地区に、これまで発見されていなかった弥生時代の集落を想起させる溝状の遺構を検出したことが注目される。これまで宮崎市内で現在水田として利用されている部分から住居や集落を検出した例ではなく、住居等の調査は水田面より一段高い所で行ってきた。しかし、今回の調査では現在水田となっていても後世の水田開発や圃場整備等による旧地形の変化がかなり進んでいるために、丁寧な試掘調査と慎重な旧地形の復元を行う必要性が生じた。

芋字遺跡ではD区において、墓若しくは祭祀的な性格を持った土壙を検出したことも、これまで発見されていない祭祀遺構や墳墓群の存在の可能性を高くし、丘陵部の植林やミカン畑の開墾等による旧地形の変化を想定し試掘調査をする必要性が生じた。

しかし、川を挟み丘陵に囲まれた微高地での弥生時代の集落と、丘陵上の墓若しくは祭祀遺構の組合せは、天神川と云う大淀川の支流を基礎にした単位集落の存在が想定される。

現在、宮崎市の大淀川流域では、大淀川に面した標高30mの台地上の下郷遺跡（下北方町）、標高26mの台地上の上ノ迫遺跡（大字跡江）の2ヶ所で台地上に弥生時代の環濠集落が発見されている。その中で、二月田遺跡の様に微高地に集落遺跡が存在すると考えられることは、大淀川流域は大淀川に面した台地に載る集落と大淀川の支流单位で微高地に載る集落との2種類の集落形態があったと考えられる。両者は共に弥生時代中期中葉の北部九州系の土器を初現とする点、弥生時代終末期頃に廃絶する点は共通するものがある。上ノ迫遺跡は古墳時代前期に属する100

mを超す前方後円墳が3基存在する生目古墳群と同一台地上に存在しているために集落立地の変更が必要であったと考えられるが、他の2遺跡の廃絶は別の理由によるものと考えられ、古墳時代初頭の今後の課題である。

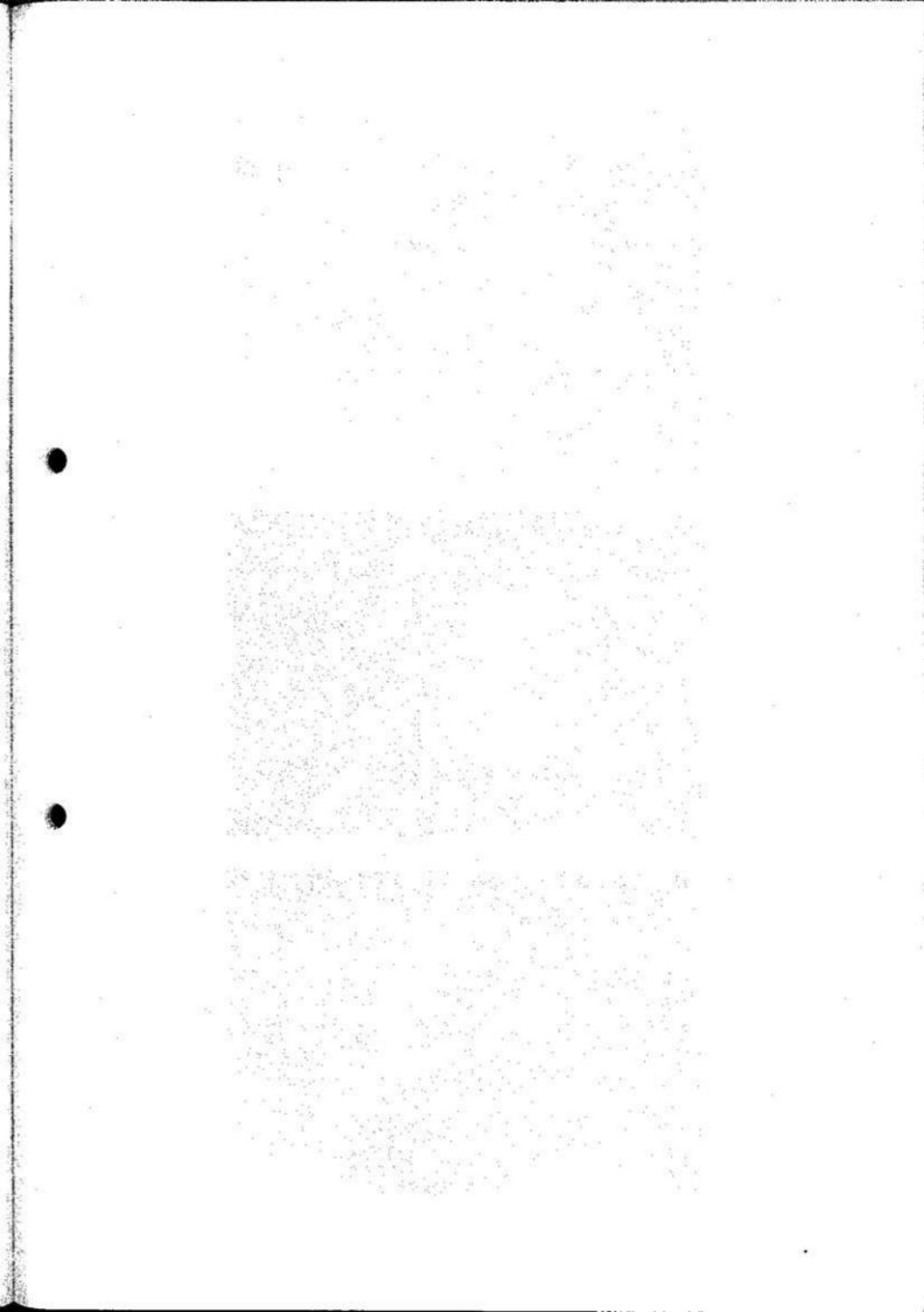
二月田遺跡では、西側の川に近い部分に弥生時代と飛鳥時代の遺物、東側の丘陵よりの部分で奈良時代から平安時代の遺物が出土し、時期差が明確なのは、水田利用面の拡大と居住域が丘陵寄りに移行したためだと考えている。

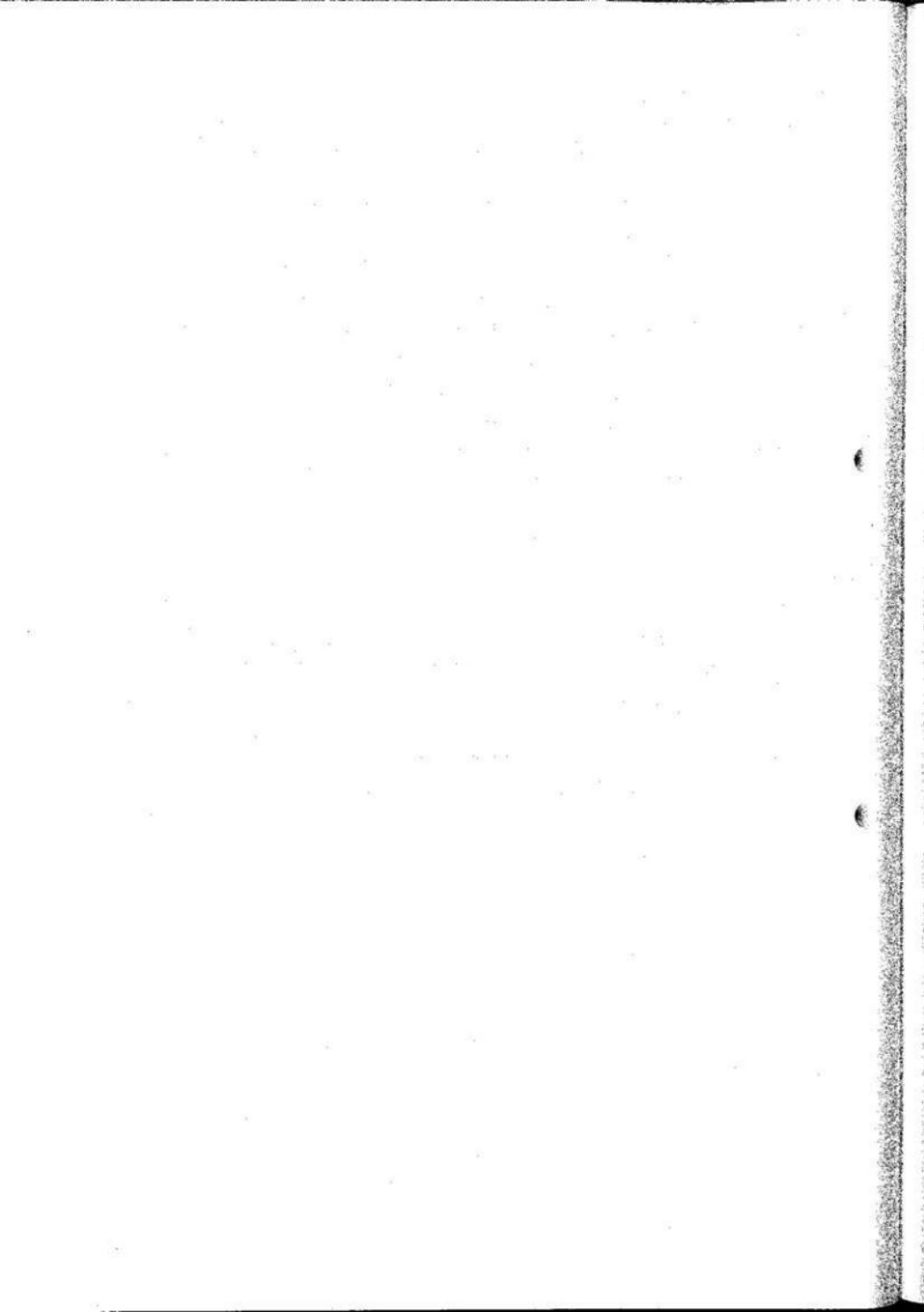
また、二月田遺跡、芋字遺跡に見られる溝状遺構埋土や明確な遺構を伴わずに破碎されて搅乱状態で斜面や地面一面に土器が検出される出土状況は、平安時代後期以降に何等かの土地利用の変化が有ったためと考えられ、1057年に浮田莊が宇佐宮領として立券されて開発されたことや、富吉の地名は穆佐院の一部として南北朝期に初めて出てくること、南北朝期には既に穆佐城が存在していることなどが原因だと思われるが、その解明が今後の大きな課題として残された。

最後になりましたが、柳沢一男宮崎大学教授には現場において多くの指導助言を頂いたことに感謝申し上げると共に、台風の上陸で水没したり、ダンプやメンクが直ぐ隣を行き交い、振動と粉塵の中で硬化した粘土と格闘して頂いた作業員の皆様に改めて感謝申し上げます。

〈参考文献〉

- | | | |
|------------------------------|---------|--------------|
| 下田畠遺跡他 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第3集 | 1985 | 宮崎県教育委員会 |
| 蕨遺跡 高岡町埋蔵文化財調査報告書第6集 | 1994 | 宮崎県高岡町教育委員会 |
| 学頭遺跡・八児遺跡 | 1995 | 宮崎県教育委員会 |
| 下村窯跡群報告書 佐土原町文化財調査報告書第10集 | 1996 | 宮崎県佐土原町教育委員会 |
| 余り田遺跡 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第1集 | 1997 | 宮崎県埋蔵文化財センター |
| 角川日本地名大辞典 45 宮崎県 | 平成5年 3版 | 株式会社角川書店 |
| 須恵器集成図録 第1巻 近畿編 I | 1995 | 雄山閣出版株式会社 |
| 日本土器辞典 | 1996 | 雄山閣出版株式会社 |





図版1 二月田遺跡 1



A区



B区東側より



B区西側より

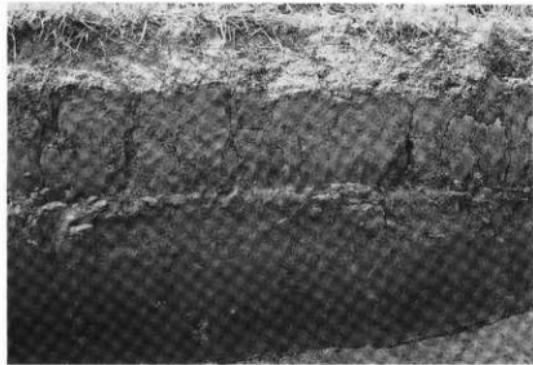
図版2 二月田遺跡2



B区土器出土状況

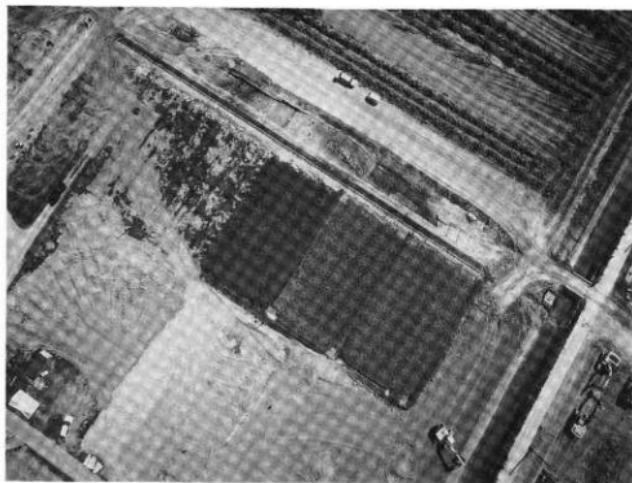


B区溝状遺構

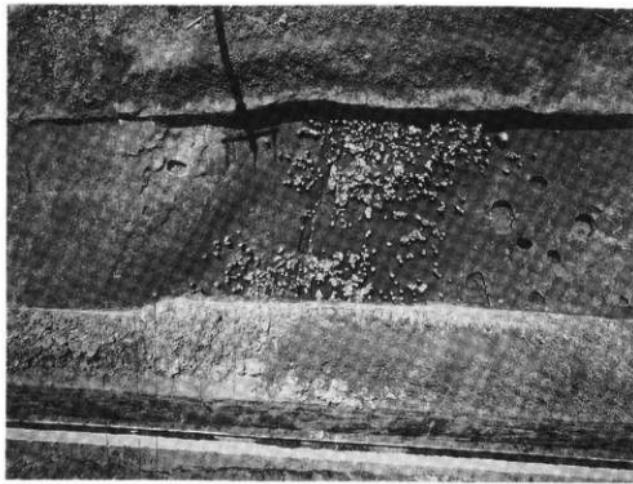


B区セクション

図版3 二月田遺跡3

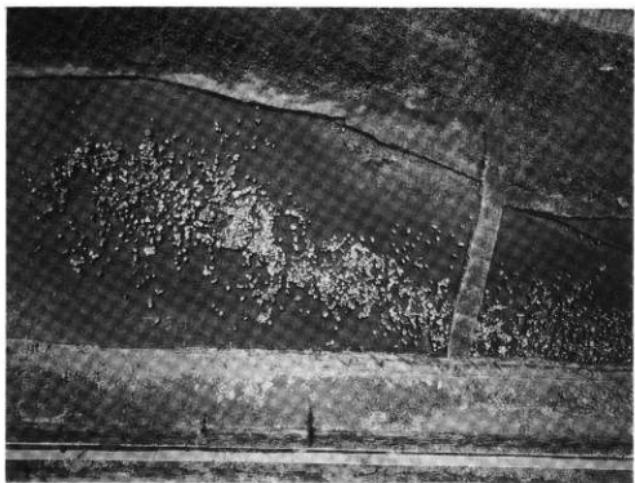


溝状の遺構周辺

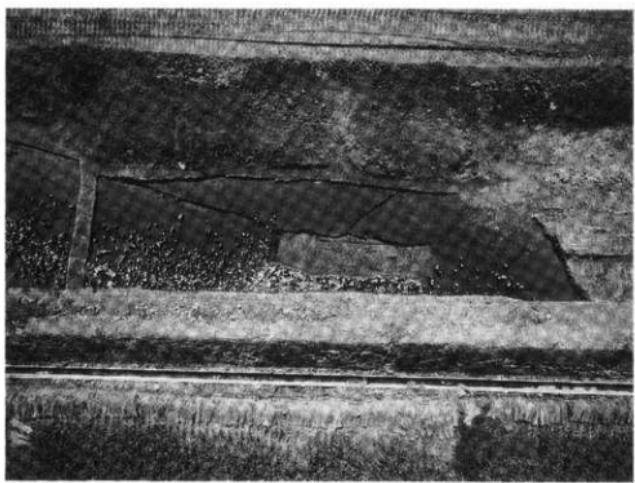


東側部分

図版 4 二月田遺跡 4



西側-1



西側-2

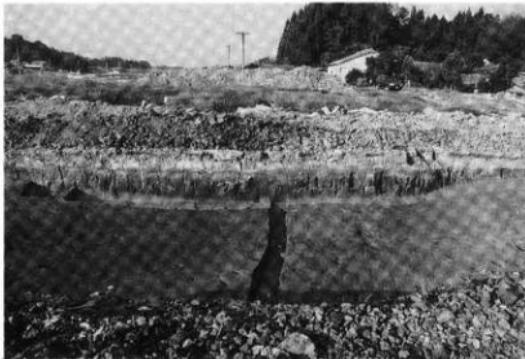
図版5 二月田遺跡5



東側出土状況



西側出土状況

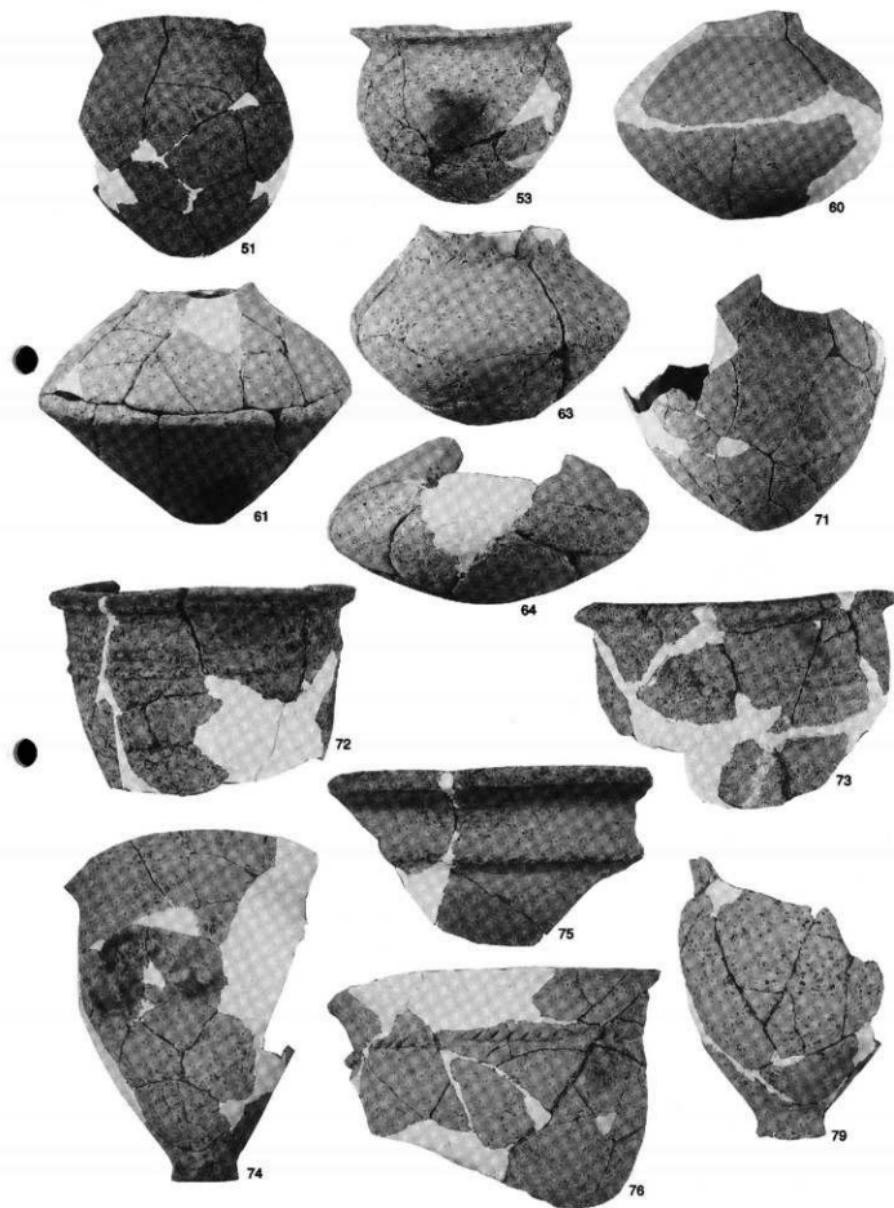


東側セクション

図版6 二月田遺跡6 出土遺物



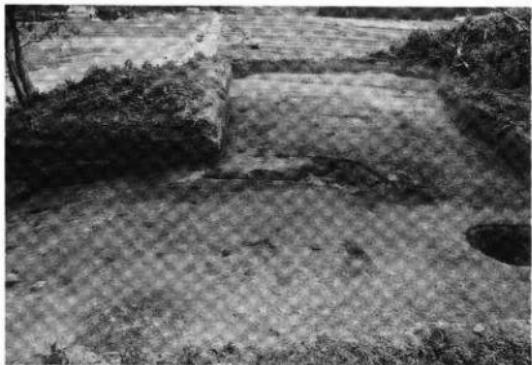
図版7 二月田遺跡7 出土遺物



図版8 二月田遺跡8 出土遺物



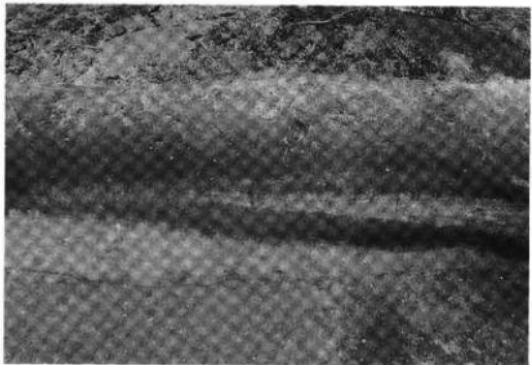
図版9 芋字遺跡 1



A区



A区出土状況

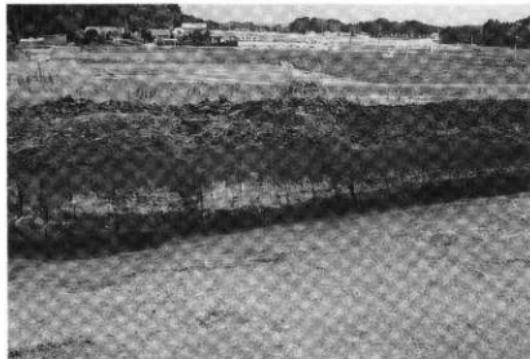


A区セクション

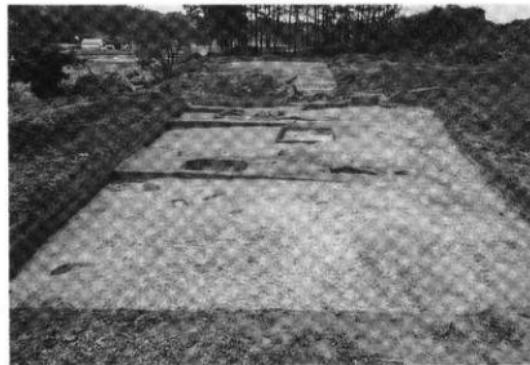
図版 10 芋字遺跡 2



B区

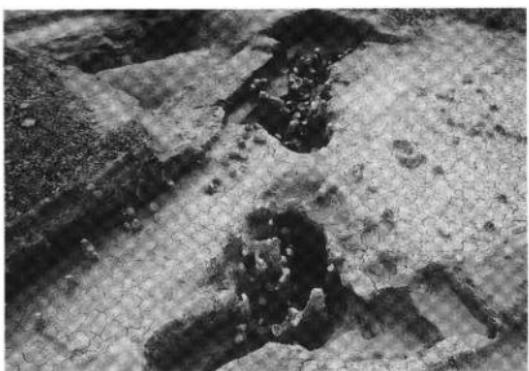


B区セクション

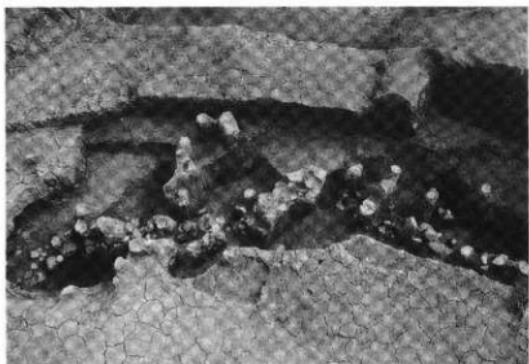


C区

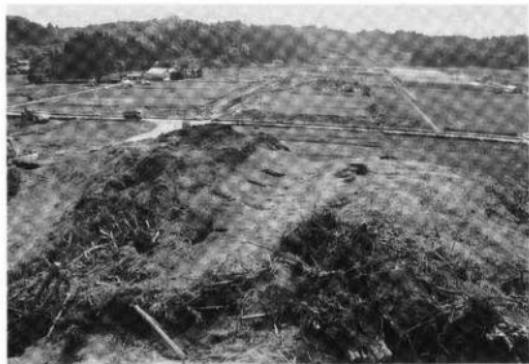
図版 11 芋字遺跡 3



C区水穴

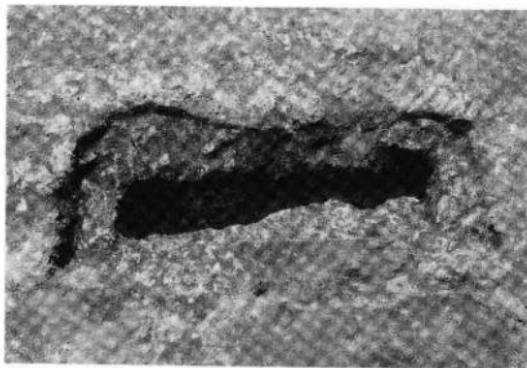


C区水穴出土状況



D区から二月田遺跡を望む

図版 12 芋字遺跡 4



D 区土壤

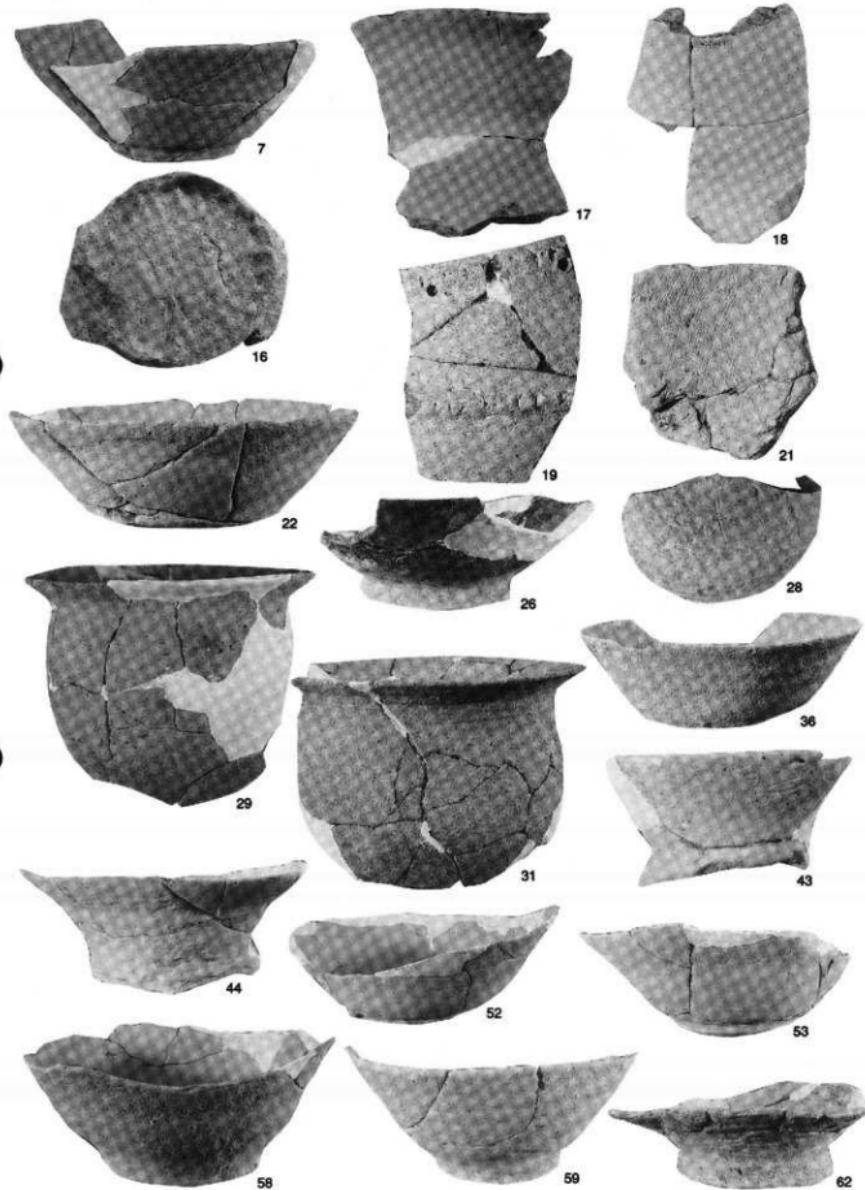


E 区

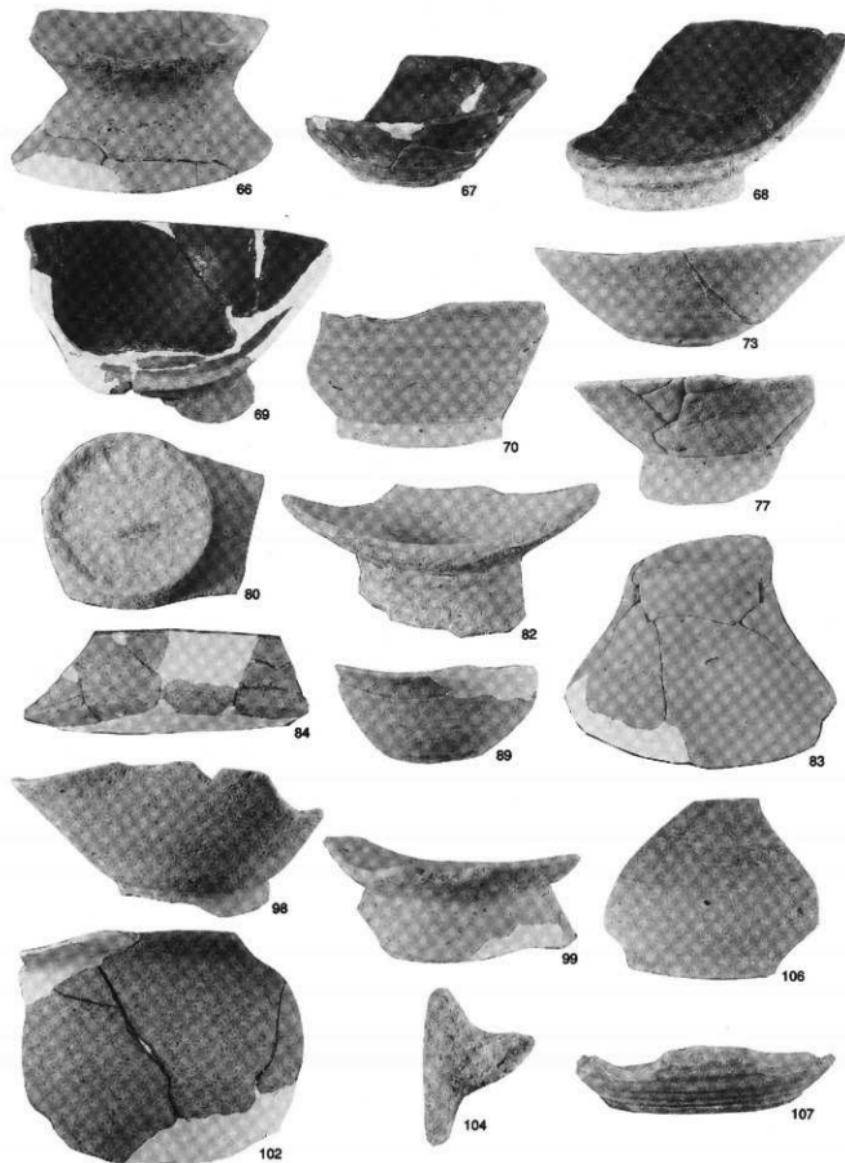


E 区出土状況

図版 13 芋字遺跡 5 出土遺物



図版 14 芋字遺跡 6 出土遺物



報告書抄録

ふりがな	にがつだいせき・いもあざいせき							
書名	二月田遺跡・芋字遺跡							
副書名	県営手作成基盤事業 富吉地区 にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第35集							
編著者名								
編集機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒880-8505 宮崎県宮崎市橘通西一丁目1番1号 TEL 0985-25-2111							
発行年月日	西暦1998年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
二月田	ふやだときんふやだき しおねあざ 宮崎県宮崎市大字 とみよし 富吉	45201		31度 55分 57秒	131度 21分 24秒	19950904～ 19951011 19960802～ 19961108	160 325	圃場整備
芋字	ふやだときんふやだき しおねあざ 宮崎県宮崎市大字 とみよし 富吉	45201		31度 56分 02秒	131度 21分 08秒	19960802～ 19961108	780	圃場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
二月田	散布地	弥生 奈良～平安	溝状遺構 5本	弥生土器 (甕、壺、高坏、鉢、 器台) 土師器 (坏、甕)				
芋字	散布地	古墳	溝状遺構 2本	土師器 (坏、甕)				

二月田遺跡・芋字遺跡

県営担い手育成星盤事業 富吉地区にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998年3月

発行 宮崎市教育委員会